
月は何も語らない

黒石遼守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月は何も語らない

【Nコード】

N8341Z

【作者名】

黒石遼守

【あらすじ】

虚有と呼ばれる死者。

『存在しない筈の存在』であるそれは現行世界の理から外れ、理外の能力を媒介し、常に己の未練する矛盾理由に従ってのみ事を為す。

病質的な動機を以て盲になったものは、往々にして過つが——それは果たして死者故にか。

同じく理外に足を踏み入れた者・媒介者は、彼等を視、識り、想う。

一体、己はどっち側なのだろうか？

新伝綺系小説サークル・矛盾でふらぐ。
(<http://mujunderfrag.dou-jin.com/>)で連載している作品です。

あたしはもう死ぬのかな、と思った。

先刻^{さつき}までお留守番をしていた筈なのに、急に家が大きく揺れたと思ったら、身体が何処かに落ちていた。何が起こったか判らないまま、気が付くと、もう周りは真っ暗になっていた。

身体の上に何か重い物が乗っていて、そのせいで動けず、全身が踏み潰される様に痛い。目にゴミが入り涙が流れてきて、埃っぽくて咽せた。目を擦りたいけれど、動くのは指と首だけ。足は何処にあるのか判らない。

お父さんとお母さんは何処に居るのだろう……、そう思っで大声で呼ぼうとしたけど、声が上手く出せず、寂しそうな犬の鳴き声みたいになる。

諦めずに何度か声を出そうとしていたら、急に口の中一杯に十円玉の様な、変な味が広がった。同時に、胸の辺りに全力で走った時の、何倍もの締め付けられる様な痛みが走る。喉から生温かいものが込み上げてきて、吐き出してしまった。

首筋を垂れるぬるぬるした感触と鉄の臭いで、それが血だと判って、自分がどうなったのか、どうなってしまうのか、全く判らず、やっぱりあたしは死ぬのかな、と思った。

途端に怖くなって泣きなくなっただけど、上手く息が出来ない。苦しくて無理に空気を吸おうとしたら、ただでさえ痛かった胸がもっと痛くなった。自分の口からは、ひゅーひゅーと気持ちの悪い音が出る。

物凄く嫌なのに止めたくても止められない。その音に、とても腹が立って、だけど悲しくて、目のゴミで流していた涙は、今は自分で泣いていた。

お父さんとお母さんに助けてもらいたい。けれども、あたしはお留守番をしていたのだから、近くには誰も居ない。自分はこの暗闇

の中で、独りで苦しんでいる——その事実で余計に怖くなった。

誰も助けに来てくれない、身体を動かす事も出来ない。血と涙でぐちゃぐちゃになっていて、喉から変な音を出す気持ちの悪いあたしを、お父さんとお母さんはきつと助けしてくれないだろう。こんな風にあたしが暗闇の中で独りぼっちなのは、もう死ぬからだ。

……ああ、これが？死ぬ？って事なんだ。

そう思っていると、がらり、と何かが崩れる音がした。

暗闇の上の方に穴が開いて小さな空が出来た。闇が破れて周りが仄暗くなる。それを見て、先刻までの考えが消えて無くなった。

暗闇の中に独りで居た訳じゃなかった、ただ明かりが見えなかっただけで、まだ別に死んでいなかった。少しだけ、まだ生きられそうだと思える。

——

小さな空に星は無い。代わりに満月が浮いていて、独りでこちらを見下ろしていた。いつもなら、綺麗だと思ふ筈の白い光が、何故かとても不気味に見えた。

無理矢理破って作った様な夜には、月しか無い。他には何も、何にも無かった。月は独りだけあたしを見ている癖に、助けてくれない。こんなにも自分の光であたしを照らしてくれているのに、こんなにあたしが痛がっているのに……何もしてくれない。

血を吐いて、身体を押し潰されているあたしは、月の光で照らされている。はつきりと見せられたその姿は、間違い無く瓦礫に埋もれて死に掛けている自分だった。

そっか……。あたしはまだ死んでいない。だけど漸く解った。

月があたしを殺したんだ。

こんなにも苦しんでいるのに、あんなにもはつきりと見ているのに……月はあたしの事が嫌いなんだ。だから殺そうとしている。

無性に悔しくて、裏切られた様な気がして、あたしは泣きながら口を動かしていた。

「——あたしだって、お前なんか大っ嫌いだ……」

不思議と、空に向けたその一言だけは、上手く喋る事が出来た。

五月十四日

俺は走る事が好きだった。

ランナースハイ・ジャンキーって訳ではなく、走る爽快感よりも単純に自分の手足を思い切り動かしていると感じられるのが堪らない。スポーツウェアを着込んで携帯用のヘッドホンネックバンドを付け、インストを流しながら走る。それだけで一時的に世界の色が変わる気がした。

腕を振って風を受け、足で地面を踏み締める振動。前へ前へと進んでいき、景色が自分を中心後ろに下がっていく。どんどんと変わっていく風景と、筋肉を動かして溜まったものを吐き出す感覚。これが楽しくなくて何の為の身体だって言うのか。

ただ問題なのは、俺は夜にしか思う存分走れないという事。

街の音の殆どが寝てしまった時間、誰にも見られない間だけ、俺は本気で、心行くまで街の端から端まで疾走出来る。

電柱の上に登って、それを飛石代りにして遊ぶなんて事も、この時間帯にしか出来ない。剩あまつさえ、家の屋根に飛び乗って、体操選手の真似事をしながら飛び降りるなんて、真っ昼間からやらかしたら大騒ぎになる。

その時の俺は、ニュートンの林檎よりも、はつきりと万有引力を表現しているだろうに。

やっぱり愉しいが、行き過ぎた力も考えものだ。？生命エラン・ヴィタールの躍動？のお陰で、自分の体質に困る事無く生活出来ているのは確かなので文句は無いが、せめて必要最低限に留められれば良かったのに。

限界を知らないから、何処までも動きたくなる。

ストレスの様に、毎日少しずつ溜まっていき、何処かで発散しないと爆発する。余分な生氣は身体を疼かせる。『生命の躍動ちから』だなんて、よく言ったものだ。我ながら、この名前程、自分の能力を表

している言葉は無いと思う。

電柱に飛び乗って、その上から夜空を見上げてみると、月は雲に隠れて太陽の光も届かない。俺は立ち止まって思わず笑ってしまった。

「——もうちよつとだけ、遊んでいこうかな」

誰にも水を差されずに楽しめそうだ。明日は学校もあるし、街が起き出す前には帰ればいいだろう。それに、日が昇るまで時間はたっぷりある。

俺は少しずれたヘッドホンの位置を直して、あと三曲分だけ走っていこうと駆け出した。

*

「——ん、朝……。何か、夢……。嫌なのを見た、様な……。？」

カーテンの隙間を縫って這入ってきた光で、ぼうつとしながら目を醒ました。

毎度の事だが、顔に直接当たる日光っていうのは好きになれない。子供の頃俺は、太陽光には細心の注意を払って生活しなければならなかったから、その影響だろうか。まあ、そんな事も事故の後には必要無くなってしまったのだが。

「どうでもいいか、そんな事……。顔洗いに行こ」

昨日——と言うよりも今日の深夜——存分に夜のランニングを楽しんでベッドに入ったのに、寝起きをわざわざ最悪にする必要も無い。

日の光を避ける為にさっさと身体を起こし、部屋を出て洗面所に向かった。

太陽で子供の頃を思い出したからか、廊下に出て改めて慣れ親しんだ家を見回すと、それなりに月日の流れを感じさせる。

考えてみれば、もう、あの事故から十二年。

あれを何と呼ぶのかとすれば？死？だろう。取り残された俺の周

りにあるのは死。恐怖と孤独からにじり寄って来るものも死。周りの物は全て死んでいて、周りの者は死んでいく。全てが死んだ、例外無く。

ぼうつとした意識でそんな事を考えながら、ふらふらしつつ階段を降りて、洗面台に辿り着いた。余計な事は思い出さなくていい、今はどうでもいい事だ。

蛇口から水を出して、それを手で掬って思い切り顔に掛けると、爽快なんだか不快なんだかよく判らない感覚で、気分と意識がはつきりする。

ぼたぼたと水を垂らしつつ放しになっている顔をタオルで拭いてみると、鏡に映った自分の顔が目に入った。

「……………」

白い髪に淡紅色の眼。肌も異様に白く、日本人離れしている。両親共に日本人だが、俺の容姿は鏡に映った通り。

アルビノ
先天性色素欠乏症。それが俺の容姿の原因。

メラニン色素が生成されず髪から色が無くなって、同様に肌も白くなり、眼は色が無いので血液の色が透けるから紅く見えるとかいう遺伝子疾患。メラニンが無い為に紫外線が吸収されず、太陽光が体に毒らしいが、俺の体は紫外線を物ともしない。

この体質には、医者も首を捻るばかりで答えを出せない始末だ。アルビノじゃない奇病なんじゃないか、なんて思われているかも知れない。幾ら検査をしてもメラニン色素が無いから、アルビノとして判断出来ないのだが。これも、あの事故以来、何故か持っていた？エラン・ウイタール生命の躍動？という奇妙な名前の能力のせいだろう。

劣性遺伝でそれを無視。我ながら戯ざれている。

「まあ、普通に生活出来るのに不満は無いが……………」

アルビノとしての特徴は、髪や眼にありありと出ているのだが、生活に不自由な特徴——弱視だとか、紫外線に対する抵抗力の無さ、眼に入る光を調整出来ない羞明しやうめいだとか——は子供の頃にはあったが、今はもう無い。

昔は他人と違っていて、碌に外で遊ぶのも難しかったアルビノの症状を恨んでいた。髪を黒く染めたりしても、サングラスを掛けなければならなかったし、白過ぎる肌は好奇の対象にされる。子供ながらに周りの大人が、口には出さないけれども俺に対して当惑していたのも判った。

気を遣ってくれての事だったのだろうが、逆に自分が普通じゃない事が余計に際立った気がして、遠い隔たりを感じた。常に自分だけ独りで居る様な、まるで死んでいる様なものだ。

だから、髪を染めるのを止めた。気を遣われなくなかったし、周りを気にしたくもなかった。他の人と同じ様に振舞って、自分の事を『普通じゃない』と考えるのを止めて『個性』だと割り切った。

それを実行してみた時には、症状が無くなっていたのは幸運だったと思う。お陰で生活自体は何の支障無く出来たから、今は、この容姿の利点と言えば、大抵の人には一目で憶えてもらえる事だ。

赤と白は未だに嫌いな色だが、今では昔の様に自己嫌悪と繋げてはいない。

「よし」

頬を軽く自分で叩く。頭の方もしゃつきりとしてきた……早く弁当でも作ってしまおう。

そして台所にあつたのはパンとベーコン、卵にレタス。

「……………」

此見よがしに置いてある、この狙った様な品揃え。サンドイッチを作れて事か。

両親は朝が早いので、何故この食材が放置されているのか答えてくれる人は居ない。少し台所に立ち尽くしていると、食材に隠れて置いてあつた紙がどういう事が教えてくれた。

『ゴメン！ 今日はこちらでお弁当作っておいて。又エちゃんのお腹を満たす量はある筈だから、ヨロシク！』

書き殴られた字の筆跡は間違い無く母親のもので、冷蔵庫を開け

てみると、殆ど空に近かった。弁当の材料がこれしか無い事に気付いて、慌てて書き残したのだろうか。選択肢を与えるつもりが無いのなら前日に伝えておいてほしい。

……まあ、愚痴を言ってる時間も無くなる、さっさと弁当を作って高校に行かなくては。

卵とベーコンを適当に調理し、レタスとパンでその具材を挟みサンドイッチを作って弁当箱に詰める。切り落としたパンの耳は、今度揚げて砂糖を塗ってお菓子にでもしよう。油っこくて嫌だと言われるが、結構あれが好きなんだけどな……。

ついでに朝食の準備もしてしまおう。といっても、トーストを三枚焼くだけだのだが。あとは牛乳に、ブルーベリージャムとアプリコットジャムとマーマレードを用意する。

今朝は誰も居ないから、『太るから駄目！』と母さんに怒られずにジャムをたっぷり使える。普段から太る事は無いって言っているのに、やたらと食べ過ぎに警戒されるのは困り者だ。

俺は鼻唄交じりに三種のジャムを堪能した後、台所を片付けてから身支度を整え始めた。

歯を磨き、学校指定のシャツを着る。左側に付いたボタンを上から下まできつちりと閉じ、ネクタイを締めて上着のブレザーを着る。ああ、そう言えばもうすぐに六月だ。夏服を用意しておかないと。肌が露出する半袖は嫌いだから、長袖のシャツを。

着替えた後、寝癖の付いている髪を梳かし整える。友達は白い髪が綺麗で羨ましいと言ってくれるが、俺と同じ様に色を抜きたいっていうのは今一つ理解出来ない。髪が傷むだけだと思うんだが。

鏡で寝癖が無い事を確認して、制服も整えてから家を出た。

外は直射日光と違って、五月晴れの陽光が気持ちいい。高校には徒歩でも行けるし、今日は重い教科書も無いから歩いていこう。

やっぱり、地元に高校があるっていうのはいい、

「イツエエエイ！ 珍しく朝から又エを発見したぜー！」

——唯一つ、馬鹿が居る事を除けば。

思わず微笑んでいた顔が無表情になる。一瞬で気分の良かった朝がぶち壊された。

振り返り様に、もうすぐ後まで来ている奴に向かって拳を放つ。向こうも何か仕掛けてきているだろうが、パターンは決まっているので、考える必要も避ける必要も無い。

「ふぐあっ!？」

予想通り極まった。左手に確かにある感触は、硬い顎への一撃。俺に殴られた男——同級生の有馬孝之は、ありまたかゆき見た感じでは割と気持ちよく転がった。目算でざっと二メートル程。

完璧だ、奴はもう立てない。こちらに飛び掛ろうとしている所に、カウンター（アップパーカット）が顎に極まった。奴の意識を繋ぐ神経は刈り取られている。

チョッピングライト振り下ろしの右手刀ではなく、飛び蹴りにすれば良かったものを。そうすれば奇襲としてはリーチの長さから言って、避けられない限り、そうそう反撃を喰らう事は無かっただろう。まあ、俺は躲せるのだが。

わざわざ大声を出しながら相手の攻撃の射程内で急所を曝す真似をするとは、間抜けめ。

「っああ……、気持ち悪いよお」
学習能力皆無の愚猿ぐえんが呻く。

毎回人を見つけると攻撃を仕掛けてくる罰だ。何を考えて、町の往来で大声出して恥ずかしい事をしてくるのかは解らない。いや、思考回路が著しく人格と共に破綻した奴の考えなど、解る訳も無いのだが。

「当たり前だ馬鹿。顎を殴られれば脳味噌が揺らされるんだから」
「ヤベエ、吐きそう……」

「知るか。勝手にくたばれ」
「この、げどー」

辛うじて、動いていた手がぱたりと地面に落ちた。
何とでも言え。先に仕掛けてきたのは有馬だ、俺は悪くない。正

当防衛だ。あそこで反撃しなければ、俺が被害を受けていたのだから。第一に、どうせ気が付けば回復している。半端タフネスめ。

「ん？」

ふと、馬鹿を放置して道の前を見遣ると、一部分だけを人が避けて通っているのが見えた。何だろうか。気になり、少し足早になる。遠目に、ガードレールが歪んでいるのが見えた。だが、避けて道を通っている人達は、ガードレールを気にした訳ではない様だ。縁石の近くに視線を落としている。

「……………」

三毛猫の死体だった。

小さな身体は血で赤くなっている。ただの赤い液体なのに、それが血だと判ってしまうだけで途端に生々しい。流石に鉄の臭いはしてこないが、それでもそれは血で、流れ出ていて、死を想起させる——意識が、十二年前の記憶に繋がる。

孤独と恐怖——生きる意味と理由、その強制と消失。

裡にざわめく様な、何とも言えない不安感が湧き上がる。しかもそれは、俺自身とは乖離乖離していて、悪夢に似ている。上手く思い出せないのに、とても厭な感覚だけがある。過去の肯定と現在の否定が重なり合っているとも言えいいのか——矛盾だ。

頭を振って、意識を現実いまに戻した。

この猫は、車に轢かれてしまったのだろうか。まだ死体が回収されていなくて事は、つい最近轢かれたばかりの様だ。血もまだ、黒く乾いていない。

不自然に大きなタイヤの跡が歩道側に弧を描いて残っているのだから、深夜辺りにドライバーのハンドルミスで轢かれてしまったのだろう。

これで皆、ここを避けていたのか。

明確な死。命は無い。つまりこの『三毛猫の存在』は終わった。

酷く簡単に、戯あそれているとしか思えない程に、終わればそれまでこの猫の意味はここで終わる事になった。この猫の存在理由はその

命と一緒に消えた。矛盾の表出としか言えないが、それは——顕れた方がいいのか、否か。

そんな事、俺が決める事でもないし、知るべき事でもないが、
「……霊になつても、碌な事、無いからな」

俺は動かない猫に目を落として、そんな事を呟いていた。

*

学校全体に響き渡る定刻の鐘の音。

四時限目が終了して昼休みになった。周りは勉強道具を片付け、昼飯を摂る為に机を離れていく。その騒々しさの中で、俺は机に突っ伏していた。

身体——っていうよりも気分が怠い。朝あんなものを見てしまったからか、兎に角気が起きない。

「ヌーエー、顔に生気が無いぞー。真っ白……なのは、いつも通り羨ましいけど、元気が無い顔してるわよ。どしたー？ 鬱かー？」

——なのに、能天気な声と共に、不意に抱き付かれた。怠い体に申し掛かる体重が、調子の悪い体の不快感を更に増幅する。誰だ、と考えるまでも無く、明ら様^{あかさま}に怠そうな人間にこんな事する奴は見当が付く。剩え周りの男子が俺達を見ているのだから。

「……鬱陶しい」

「んん？ 私は抱き心地がいいわよ？ あ、いい匂いがする」

「ああもうっ」

面倒臭くなつて振り払おうとしたら、背後から抱き付いてきた相手は、それを見計らつていたかの様に楽しそうに笑い、長い髪を棚引かせながら離れた。

「……何の用」

しっかりと相手の姿を確認すると、予想通りの奴がそこに居た。悪友の鯀木鏡花^{くみききょうか}。長い黒髪は、鴉の濡れ羽色という形容がぴったりで、顔には薄く化粧をしてある。それが鏡花の顔に品良く馴染ん

でいて、何処と無く、キャリアウーマンの様な雰囲気醸し出している。

正直、本気で怠いので用件は早く済ませてほしい。

「えっとね、お昼一緒に食べな」

「断る」

答えるのにコンマ秒も不要な用件だった。

「えー、速いよー、何だよー、折角私が誘ってやってるんだぞー。」

この学校一の美女と公式に認定されたこの鯨木鏡花サンがつー！

鏡花は仁王立ちしながら、掌を自分の胸の上に置き傍迷惑な大声を出す。その内、机が教壇の上に登り兼ねない勢いを感じる。鏡花はどれだけ怪訝おかしな振る舞いしても、何故か校内に於いての、その地位と信用を失墜させない。裏工作でもしているのだろうか。

鏡花は生徒会副会長なのだが、まだ前任の会長との交代が行われていないだけで、本来は得票数から言って会長でも怪訝しくなかった事実上の会長だ。

容姿端麗で文武両道、詳しくは知らないが『校内No.1美女』とか、誰が考えたのか豪い恥ずかしい称号（校内投票による選抜らしい）を持っていたりと、月並み美辞麗句が連なる、ある意味ベタな奴だ。

ベタだが、その能力に則した結果を出すので、大人気。生徒会としての活動も、生徒の意見を汲み取ってしっかりと反映させるし、教師側とも戦う時は徹底して戦う。高校二年生とは思えない行動力と物言いは、それこそ、教師もたじろぐ程で、生徒会を形骸的にせずに機能させているのは、偏ひとえに鏡花の力……らしい。

普通なら、鏡花の事は、俺の容姿に何の臆面も無しに付き合ってくれる、仲の良い友人として快く受け容れるべきなのだが、

「煩いな、お前は確かに美女かもしれないが、中身は産業廃棄物並に悪質だろうが」

という事情と、こいつが俺を色々な事に利用しまくるから性質たちが悪く、打ち明けると鬱陶しい。何もかも、俺が視える事を、こいつ

が知っているからの気がしてならない。

今までも、視えるなら学校の七不思議を発見出来るとか、廃屋に行けば何か視えるとか、墓場に行けば何か視えるとか、無駄に心霊スポットツアーを組まされた。いや、確かに場所によっては視えたのだが、その殆どが悪霊——語弊があるかも知れないが、害にしかならなかったから間違っではないだろう——の様な奴等だった。

そんなのに引き合わされる機会ばかり提供する鏡花に対して、今では解ってやっているんじゃないかと邪推する。流石に鏡花がサデイストとは言え、それは有り得ないが。

「褒めるか貶すか、どちらかにしてくれないかしら？」

「じゃあ俺に構うな産業廃棄物。お昼と一緒に食べようとか言いながら、人の弁当を狙っている奴と昼食を共に出来ない」

「……あれ、ばれてる？ 何で？」

鏡花はきょとんした顔で首を傾げる。やっぱり予想通りだった。

「鎌掛けた」

「わっ！ 汚い、どっちが産業廃棄物よっ！ 貴方の方が余程汚い！」

失礼な事に鏡花は俺を指差して糾弾してくる。

「俺はまだ浄化可能だ。お前は無理だ」

「えー、否定しましうよ、そこは。肯定して更に人の事貶す、普通？」

「煩いな、もうすぐ馬鹿が来るから俺は行かせてもらう」

座右の銘が『他人ひとの不幸は蜜の味』を地で行っている様な奴に、何も言われたくない。

時計を確認すると、昼休みになってからもう五分以上経っている。時間的には既に危険だ、これ以上鏡花に構っている暇は無い。怠いとか言っている訳にもいかない。もし有馬が来たら余計に疲れるだけなのだから。

俺の言葉を聞いた鏡花は、不思議そうに言う。

「馬鹿って有馬君の事でしょ？ 何が不都合なのよ。それに貴方、

彼の事馬鹿って言ってるけど、私達と同じ位でしょ、彼の成績？」

「勉強は人間性を計る物差しにならない」

成績のいい人間が必ず人格者だったら、どれ程馬鹿の相手が楽になる事だろう。

「うん、まあそうね」

鏡花は俺の言葉に納得する様に頷く。それで納得してしまうのだから、やっぱり有馬は人格破綻者に分類される。

「解ったなら俺は行く」

「何処に？」

「馬鹿に見つからない所に」

いちいち馬鹿に構っていると、それだけでフルマラソンをした様な疲労が精神的に溜まる。接触は出来るだけ絶つべきだ。

すると鏡花は何かを思い付いた様な素振りをして、

「ああ、だったら生徒会室開けてあげましょうか？ あそこなら一

般生徒は入れないわよ」

と提案した。

「……………」

——考える、熟考するべきだ。裏が無いかどうかを見定めないと、何かの罠かも知れない。

先ず、第一にこいつは俺の昼飯を狙っている（自分の分は持っている。ただの嫌がらせ）。これは俺が死守すれば済む問題だから除外。

次にこいつが俺に対して別件（厄介事なのは確定）を持っているかどうか。これはこいつの様子を見た限りでは何も（謎の書類等を）所持していないし、『開けてあげましょうか？』と言っているから、生徒会室はまだ開いていない状態。何の小細工もしていない可能性が高い。

最後に鏡花と馬鹿の関係性（危険性とも言える）。これが一番定め辛い。俺という共通の友人が居ながら、二人は俺を交えた状況になった事が無いし、二人に交友関係があるとも聞いた事が無い。

鏡花が『馬鹿』有馬』という事を知っていたのは気になるが、恐らく普段から馬鹿みたいに俺のところに襲撃に来る奴の事は有名なだろう、馬鹿だから。一回教室のドアを壊してしまった事もあるし。だから二人の間に友人レベルの関係は無いと判断出来る。が、しかし、敢えてその様な状況を作らなかった可能性も出てくる。

考えた分だけ泥沼に……この時の為だけにそれを狙うだろうか。

いや、必要性が無い。更に言えば、先刻の鏡花の発言のニュアンスから感じ取るに、鏡花は奴と接点が無い。その事を意識していない発言の筈なのだから信憑性は高い、筈。

鏡花の顔を疑り深く見る事数秒。俺が出した結論は、裏は無いというものだった。

「……じゃ、お言葉に甘える事にする」

「正直で可愛いぞー。可愛さ余って憎さ減退？」

意味が解らない事を言いながら、笑顔で俺の頭を撫でてくる鏡花。何だか腹立たしい。

「……煩いな」

そして、生徒会室の扉を開けるとそこには、

「よっ、又エ」

馬鹿の顔があった。

「——ブルータスツ、貴様もか！」

カエサルとブルータス程の信頼関係があった訳ではないが、思わず鏡花に叫ばずにはいられない。

「ははは、私を信じた貴方が悪い。忘れたの？ 私の中身は産業廃棄物並なのよ？」

俺を指差して嘲笑う鏡花。

全て計算済みだったっていつのか。俺を陥れる為にわざわざここまで無駄な労力を使用するとは、奴等の馬鹿さ加減を過小評価していた様だ……！ いや、この場合は権謀術策が趣味の鏡花を侮っていたと考えるべきか。

「因みに、私が教室に来た時から全部罷よ。勿論、有馬君が教室に来なかったのも」

「ハハハハハ、オレと鯨木さんは三日前から同盟を組んでいるのだ」
「お前は黙れっ！」

後で高らかに笑っている野郎に、上段後回し蹴りを極める。

「あべしっ！」

またもや顎に極まった攻撃。首を跳ね上げらせ奇声を上げながら、床に倒れこむ馬鹿。透かさずそのままマウントポジションを取り、動けない様に腕を捻り上げた。

「何だよー、つれないぞ……」

そんな俺の暴動を見て、鏡花が顔を伏せて急にしおらしげになる。
「私はただ、又エと一緒にお昼を食べただけなのに……」

いじいじと拗ねた様に鏡花は言う。可愛らしい仕草で、まるで自分が悪い事をした気になるのが普通なのだろうが、

「……鏡花、気持ち悪い」

「ふふっ、やつぱり？ 私も自分で演技して鳥肌立ったわ」

鏡花サン苦笑い。慣れない事はするべきではないって事だろう。

俺に対して科しなを作る鏡花なんて気持ち悪いだけだ。

「ちよっと、ちよっと！ 又エさん、余所見しながら関節技極めな
いで！ 力加減が適当になってますよー！ オレの腕がドッキリボ
ツキリ行っちゃいますよー！」

うっかり、馬鹿の肘関節を限界を越えて曲げそうになった。

「あー、大丈夫。骨は綺麗に折れた後は、より一層丈夫になるらしいから」

「折れる事前提デスカ！？ しかも希望的観測！ やーめーてーく
ーだーさーい！」

煩い奴だ。いつそのまま折ってやろうか。

「いででででっ！？ 痛いっ、痛いですよ又エさん?!」

馬鹿を無視しながら腕を更に捻り上げて、少しの間苛めた。これで反省の色が搾り出せれば苦労しないのだが、無理だ。こいつ馬鹿

だから。この後どうしてやろうか……。

「えいつ」

不意に、後で傍観していた筈の鏡花に背中を押された。その勢いで、ギリギリの所に止めていた馬鹿の腕は、限界を越えた方向に曲がる。

「ぐあっ!？」

何だか生徒会室に豪く響く、よくない鈍い音と呻き声。ゴキツ、と腕の中身がどうにか動いた感覚が馬鹿の腕から伝わってきた。

「……………」

暫し、沈黙する。馬鹿は下で、ぴくぴくと痛みで悶絶している。

……俺は悪くない。悪意はあったが俺は悪くない。寧ろ自分でやってやりたかったくらいだが、現時点で俺に罪は無い。ただの戯れ事だ。そう、戯れていただけなのだから、この場合は鏡花が悪い。

少し変な汗を掻きながら鏡花に視線で釈明を求めると、

「ドッキリした？」

と、いい笑顔でそう宣った。

「したに決まっているだろう！ 何やっているんだお前は、関節極まつてるのに更に変な方向に力を加えるな！ 綺麗に骨が折れなかつたら、どうするつもりだ！」

足元でくたばっている男を指差すと、辛うじて痛みに耐えているのか、

「あ、折れた、のか？ オレの腕……。へっ、痛過ぎて何も判らねえ……や」

言つて、ぱたんと馬鹿の腕と意識が落ちた。

「本当に折れたの？」

隣で鏡花が何の気も無しに訊いてくる。

「いや、不幸中の幸いと言うか何と言うか、関節が外れただけ。放置しておけばいいだろう」

肘関節が面白いくらいに動く。何だ、この壊れた人形みたいなもの。それに、関節が外れただけで気絶出来る有馬も凄い。これもブラシ

「ボ効果と言うのだろうか。」

「そう。じゃ、私はこれで。鍵は職員室にお願いね」

「何だ、ここで昼は食べないのか？」

「いえ、ご馳走様でした。又エのお弁当って量があるから食べ応えあつたし、美味しかったわよ？ それじゃ、鍵、お願いね」

ぽいつと、にやにやと笑っている鏡花が鍵を放った机を見ると、開かれ蹂躪された俺の弁当箱。

綺麗にパンの欠片も残さず、サンドイッチが無くなっていた。

……お腹空いた。

鏡花に弁当を奪われた後、馬鹿の弁当を頂こうと思ったが、馬鹿は既に早弁で馳走になった後だった。役立たずめ、やっぱり関節を嵌め直さなくて正解だった。購買で何かを買おうにも時間が無く、それ以前に鏡花に財布を掏られていた。くそ、あとで返してもらわないと。

そんなこんなで昼休みは終了してしまい、ただいま五時限目の現国。

腹が減って無気力に机に突っ伏す事しか出来ない。頑張って腹の虫が鳴くっていう恥ずかしい事態にならない様にしているが、お陰で授業に集中出来ない。何て燃費の悪い俺の身体。阿呆らしさと虚しさで少し泣けてきた。

「……^{あかつき}晝、授業を受ける気があるのか？」

そして案の定、先生に見咎められた。

「……ある様に見えたら、眼科に行く事をお薦めします」

少しだけ顔を上げて言うと、見る見る内に先生の顔は赤くなり、文字通り、頭に血が昇っているのがよく判った。っていつか見れば判るだろう、やる気が無いの。

「だ、だったらもういい、帰れ！」

激昂した先生は予想通りの言葉を俺にくれた。

「それじゃ、帰らせてもらいます。先生、さようなら」

「なつ。待ちなさい！」

引き止められる前に、聞こえない振りをして教室を出た。本気で帰れと思っていけないなら、言わなければいいだろうに。

取り敢えず食べ物がある所に向かおう。家には無いから……事務所に行くしか無い。

＊

俺の通う山瀬^{やませ}高校は、自宅から徒歩数十分の所にあり、俺と同じ住宅街方面に住んでいる大抵の学生は山瀬高校に進学する。だが、全員が住宅街から登校する生徒という事は当然無く、住宅街とは半端に離れた方向の南川^{みなみかわ}駅から電車通学する奴等も居る。

俺の目的地はその駅方面の、ビルが乱立していく繁華街なのだが、駅と住宅街方面では高校への道が途中で合流する形になっている。その為、高校から駅に向かうには途中までは通学路と同じになる。これも高校が山を背にした位置にある為なのだが。

しかし、山を背にしているからヤマセになって山瀬になったのだとすると、物凄く阿呆らしいネーミングだ。

歩いていると、また歪んだガードレールが見えてきた。先刻の猫はもう回収されたのだろうか、もうガードレールを避けて歩いている人は居ない。

「……………」

そんなに、俺が気にする事じゃない。

死んだから終わったとされるのが普通だ。仮令^{たとえ}、死について無關心だろうと、それで何かが変わる訳でもない。逆も同じだ。

俺がどれだけ死を忌避しても、訪れる。死が終わりとして最期に佇む限りは、変わらない——予定調和だ。素直にそこで終わればいい。自分にとっての無だし、他人にとっては虚無だ。どうにも出来ない。

死は手出しの出来ないところに在るからこそ死だ。

否でも嫌でも厭でも——それだからこそ死は死足りえる。皮肉過ぎる、滑稽過ぎる。そんな事、俺の様な奴が考えても無意味にしかならない。だが判つていても拒絶してしまう。終わつたからこそ、終わりを厭うしか無いなんていうのは——戯れ過ぎている。

だからこそ、俺は死を絶対忌避して、往々にして死を齎す霊を、終わらせたいのだろう。それこそ、鏡花に連れられて霊を視た時に放つて置いてもいい霊を『解体』したのは、自己満足にしかない様に。

そんな事を考えていると、今度は動いている猫が歩いてきた。

「——」
言葉を失った。

あの死体の猫とそっくり——いや、同じだ。全く同じの猫としか思えない。茶と黒と白の毛色や毛並みの感じも、顔の形すらも朝に見た猫と同じだ。気のせいと言ふには、余りにも印象が一致し過ぎている。

猫は立ち尽くしている俺の傍に歩いてくると、目が合ったからか、にやあ、と鳴いて歩いていった。猫は歩道を歩いていき、人とぶつかりそうになり避けるが、人の方が不自然な程に避けない。いや、避けないというよりも気付いていない様だ。

やはり、視えていない。

間違い無い。あれは、死んだものか。今朝、車に轢かれた猫。それが他の人には視えずに、俺にだけ視えている。

それを見て思わず歯噛みした。

「碌な事無いって、言つたのに……」

なる奴は結局なつてしまうのか。理由が、未練があるから、まだ世界から居なくなりたいくないと、死んでも存在するという矛盾を顯す。

厭なものだ。改めてどういふものか思い知らされるのは厭な事だ。あんなものが視えると、自分の存在が揺らく気がする。なまじ十二年前に死んだ感覚があるだけに、余計に足元が崩れそうに錯覚する。

死んでも存在すると解つてしまうと、酷く複雑な気分になる。

「あの……」

猫が歩いていった方を茫然と眺めていたら、控え目な声に話し掛けられた。

振り返ると、少女が居た。肩に掛かる自然な亜麻色の髪は飾り気が無く、まだ垢抜けない印象がある。中学生だろうか、俺の高校とは違う、セーラー服の制服だ。近隣には他に高校も無いし、見覚えの無い制服だから、俺の母校とは違う中学の子だろう。

「あつ、あのつ、済みません。猫を探してるんですけど、見ませんでした？」

俺が振り向くと、その子は何故か少し慌てながら、とても嬉しそうな笑顔で訊いてきた。

……猫、か。あの猫の事だろうか。俺には見えるが、あの猫はもう死んでしまっている。この子に視る事は出来ない。

「……どんな猫？」

「アリサっていう名前の、この位の大きさの三毛猫で……」

「ああ、三毛猫なら。先刻、あつちに歩いて行くのを見た」

「本当ですか！？ 有り難うございます！」

俺が先刻視た猫が歩いていった方向を教えると、満面の笑みで少女は駆けていった。

あの子に視えなくても、猫の方からは見える筈だし、間接的にでも逢えるといいんだが。

「……余計な、お世話だったかな」

繁華街は人で賑わっている。だがその賑わいも半端なもので、駅の近くって割には消極的に見えるものだ。

交通の便から言えば、快速線が通る大きな駅が一つ隣にあって便利だが、この南川駅自体は、下車して用を済ましに来る人は少ない。なので必然的に、地元に住んでいる人間と日常的にここを利用する人間だけが、ここには集まる。

駅周辺には多様な建物が乱立していて、大きい会社の類になると駅を越えた方に集まっている。なので、向こう側は駅の高架線を城壁とした城内都市の様にも見える。対して、こちら側は中小のテナントを入れる程度のビルや、スーパーの類ばかりになる。向こうが城内都市なら、こちらは城下町だ。

事実、区画整理や街の整備具合から言うと、あちらとこちらでは雲泥の差なのだが。少し前までは、どちらとも似た様なものだったが、十二年前の地震で郊外のマンション崩落事故が起きた時に、耐震強度を一斉に改める動きが起きた。

その際に、補強のついでに建物の改装や増築をした場所があったのに加えて、数年前に映画館やデパートを併設した大型の駅前ビルが完成したので、向こう側は一気に様変わりした。今では駅を境に向こう側は『都市』で、こちらは『下町』と呼ぶ程になっている。

俺の目的地は、下町のビルとビルの上に挟まれた、三階建てのテナントビル。両側のビルの背が高いので、へこんでいる様に見える。入っているテナントは、一階が喫茶店『ウロボロス』、二階が『黒木私立探偵事務所』、そして最上階が雀荘『麒麟』。因みにウロボロスのマスターの作るアップルパイは絶品。ワンホールで食べられる。

ビルの階段を登り、『黒木私立探偵事務所』と書かれた、いかにも胡散臭い感じがするプレートのあるドアを叩いた。

「黒木ー？ 居ないのかー？」

所長の名を呼ぶが、返事が無い。ドアノブを捻ってみると鍵が掛かっていた。誰も居ないのだろうか。いつもなら時間的に誰かが居るのだが。

「おい、捺夜^{なつよ}も居ないのかー？」

次は助手の名を呼んでドアを叩くが、やっぱり返事は無い。困ったな、ここ以外で食料を調達出来そうな場所は思い付かないんだが……。ドア、蹴破るか。あとで直せばいいし。

「——何をしている」

ドアを蹴破ろうと構えた時、後で声がした。

「そこまで堂々と器物損壊を行おうというのも中々出来ない事だが、今はその不条理な破壊活動を止めて、理由を聞かせてもらおうか」

振り向くと、開襟シャツに黒いスラックスという、字面からすれば典型的な好青年といった恰好の男が立っていた。だが、眼に掛かりそうな黒い前髪を鬱陶しそうにしている切れ長の眼と、何故かだらしく見える出されたシャツの裾が、それを台無しにして、好青年から年齢不詳の男にさせる。

ポケットからは、いつも持ち歩いているスケルトンの懐中時計のチェーンが出ていて、ベルトの方にフックで着けてある。何ともし難いタイミングで、この事務所の所長兼探偵である黒木晨夜^{しんや}が、俺の事を不思議そうに見ていた。

「よかった、ちょうどだな。さつさと鍵開けて中に入れてくれ」

「答える、お前は何をしている。釈明もしないで流せる様な状況でもないし、未遂とは言え、人の家を壊そうとしていたのだから訳を言え」

「いや、だから、事務所に来ただけだ」

「そこじゃない、ドアを蹴破ろうとしていたのは何故だ、と訊いている。こんなテナントビルの狭い通路の、それもドアの前にまで来ている人間の目的は、訪問以外に無いという事は判り切っているのだから……ん、待てよ」

と、そこで黒木は、懐中時計を取り出し時間を確認して、無然とした顔で俺を見た。

「……お前、高校はどうした」

「早退以外に答えが見つかるか？」

時間的に考えたらそれしか思い付かないだろう。こんな半端な時間に、わざわざ制服を着て出歩く奴も居ないだろうし。

黒木は冷ややかな目で俺を見た。

「そうか。それで、何の用だ？——いや、待て言わなくていい。帰れ」

「何だよ、俺はまだ答えてないよ」

「どうせ碌でも無い事だろう。お前は常温も沸点も低い性質だから、冷めていると思ったら急に激情する。それだけでも面倒なのに、主体になられた日には迷惑千万極まる」

こいつは……。自分の方が碌でも無い事に関わる事が多い癖に、よく言えたものだ。大体、普段の口数は少ない方なのに、喋る時には一言が饒舌で嫌味だ。

まあ我慢だ。昼飯の為には我慢だ。黒木の言う通り、低い沸点を超えては台無しだ。そう何とか自分に言い聞かせて、握りしめていた拳を解いた。

「台所と冷蔵庫貸してくれ。昼飯食べてないだろ？ 作るから、俺にも食べさせてくれ」

昼飯時より少し遅いが、恐らく黒木は何も食べていない筈だ。普段から不摂生な食事をするこいつには、外食するにも捺夜が中途半端な事を許さない。大人しく捺夜か俺の作る物を食べるか、栄養補助食品以外のしっかりとしたもの、店で食べるかに選択肢は限られる。

その点で言えば事務所には捺夜が居ないし、基本的にこいつは面倒臭がつて外では食事しない。今まで図書館にでも行っていたのだろう。その証拠に、図書館用に補強された、文庫とは思えないレングラ本を持っている。

「何故俺が——」

黒木が拒否しようとする前に、俺は言った。

「それと、また視た」

途端に、黒木は顔色を変え、渋い表情で鍵を開ける。

「——仕方が無い。入れ」

「それじゃ、お邪魔します」

占めたものだ。情報提供で食料に在り付けるから、こいつの事は好きだ。便利で。

黒木が中に入って行ったのに付いて行くと、外から見るのとは違って、割と広めの２LDKの事務所の中に通される。いつも思うが、小ざっぱりしている。

入ってすぐの応接間には、テーブルとソファが置いてあって、対面で依頼主の話を聞ける様になっている。だが、あれは専ら食事兼談話用と化している気がする。

台所を隠す衝立もあるが、効果が発揮されたのを見た事が無い。あとは窓を背にして、所長用の机があれば完璧に撮影用のセットと化すが、書類を纏める為のキャビネットが置いてあるだけなので、その事態は免れている。他には黒木と捺夜の部屋があり、あとは風呂と台所にトイレだけ。探偵事務所に見えない。

その勝手知ったる事務所で、台所に向かい冷蔵庫の中を確認する。ひんやりとした冷気の奥にあるのは、やたらに多い酒と調味料、他には卵等の食材が綺麗に並んでいる。流石だ、捺夜。この量を常備出来るのは、あいつの努力の賜物だろう。生活能力が低い黒木では、ここまでしつかりとは出来ない。だが、冷蔵庫内の酒を飲むのが捺夜だけだというのは、未だに信じられない。黒木は下戸で捺夜は笨だからなあ……。

何を作ろうか……冷蔵庫には白菜キムチ。冷凍室には冷飯も置いてある。……だとしたら、あと必要な物は調味料だけ。必要な調味料が置いていない訳が無い。

「キムチ炒飯作るぞ」

「味付けは普通にしろ、お前の辛党には付いていけないからな」

確認すると黒木は注文を付けてきた。

俺の味覚が怪訝しいみたいない方だな。いや、どちらかと言えば怪訝しいのだろうが、そこまで酷いとは思っていない。ちゃんと料理は作れるし。

「……判った。俺の分だけ別に味付けする」

「害が無いのなら構わない」

投げ遣りな黒木の口振りに溜息を吐きながら、戸棚からエプロンを取り出して着る。エプロンは捺夜の物だが、勝手に使っても構わないだろう。サイズぴったりだし。

冷飯を電子レンジに放り込んで解凍し始める。さて、解凍している間にキムチを切ろう。

「しかし、不思議な事に、お前でもエプロンを着ると、それなりに様にはなるな」

俺がキムチを切っている後ろで、感心した様に黒木が言う。それに対し、俺はひたすらキムチを切りながら答えた。

「だから何だよ」

よし、切り終えた。次は中華鍋の準備だ。胡麻油を熱して……と、チーン、とレンジの音が鳴った。解凍が終わった様だ。レンジからご飯を取り出していると、黒木が言う。

「いいや。お前の普段の行動とは懸け離れていてな。しかも、特別に筋トレをしている訳でもないのに、中華鍋を片手で扱えるというのものな。解つてはいても、光景としての異様さに拍車を掛ける」

悪かったな。料理が出来る様な印象が無くて。別に片手で中華鍋を振れるのは、そんなに不思議な事ではないだろうに。普通の人も力があるだけなんだから。

「まあ言うなれば馬鹿力、か」

くつ、と黒木は笑いを噛み締めた。

「……お前、鍋で殴るぞ？」

「お前の場合、洒落にならないから是非止めてくれ。頭蓋骨を陥没

させられそうだ」

「それで、今回視たものは何だ？」

キムチ炒飯をテーブルに置くと、黒木が訊いてきた。そして俺の分の皿を見て「盛り過ぎだ……」と呟き、テレビのスイッチを入れてニュースを見始める。

「――殺人事件の続報です。先日、住宅街で見つかった、腕が持ち去られている男性の死体は、一連の連続殺人と同一の犯人によるものと警察は断定し、捜査を始める方針を発表しました？」

「猫」

冷蔵庫から麦茶を出して、コップを持って行きながら答えると、黒木は顔を顰めた。

「動物か。それはまた随分な」

「次のニュースです。今日未明、万引きを見つけられた少年が店員と乱闘し、持っていた包丁で争っていましたが、自分の腹部に包丁が刺さってしまい、そのまま逃亡するという事件が発生しました。少年は現在も逃亡中――？」

麦茶を注いで、キムチ炒飯を食べ始める。中々美味しい、手前味噌だが上手く作れたと思う。

「今朝、俺が登校中に見た、車に轢かれた猫だと思う」

「他に気付いた奴は居るか」

キムチ炒飯が辛かったのか、黒木は一気に麦茶を半分近く飲み乾した。

「居ない筈、俺にしか視えてない。猫の飼い主らしい女子中学生が捜しに来ていたが、まだ猫が死んだとも気付いていないと思うな」

「その中学生の容姿と様子」

「普通の可愛い女子中学生。制服を着ていたが、何処の中学かまでは判らない。様子は先刻も言っただろ。猫が死んだ事には気付いていなくて、普通に猫を捜していただけだ」

「猫の方はどうだ」

「別に、何にも。ただの三毛猫だった」

「成る程……。後で現場を教えてください」

「いいけど、わざわざ物好きだな」

「——でも、それに振り回されるのは、あたしなんだよねえ……」

突如、俺のでもなければ黒木のものでもない、よく透る声が会話を割り込んだ。扉の方に居た声の主は、よく見知った顔。

「捺夜か——」

セミショートの茶色い髪に馴染んでいるヘーゼルの眼。白黒のアウトターとインナーの可愛いカットソーと、好きな色だと言う緋色のシオルダーバッグが今時の女の子らしい。人懐こい顔をしていて、この事務所の助手をしないで高校に通っていたなら、すぐに人気者になっただろう。

「今は『黒木彼方』^{かなた}だって何回言わせるの、又エ」

「黒木は一人だけでいいって。それに彼方よりも、捺夜の方で呼び慣れてるからな、下の名前で呼ぶのも何だか」

「恥ずかしいの？ ま、いいや、そんな細かい事」

捺夜は四年前に、ある事件で天涯孤独になったのを、黒木が養子として引き取ったから、今は『黒木彼方』になっている。この事務所の助手で、黒木の娘という事になるが、この二人は全く親子らしくは見えない。どちらかという、仲睦まじい同居人という方が合っている気がする。

「ただいま、晨夜さん。あーっ、キムチ炒飯食べてる、いいなー。

あたしの分あります？」

「おかえり、彼方。炒飯は台所にある。依頼人の様子はどうだった」
捺夜はバッグをソファに置くと台所に行き、早速キムチ炒飯を皿に盛り始めた。

「大変お怒りでしたよ」

「だらうな」

どうやら、捺夜は仕事に行っていたらしい。趣味で実践剣術をやっているから、てつきり剣道場に行っているのかと思った。しかし

依頼人の所に行つて、何をしていたのやら。

「お怒りつて、また何したんだお前」

視線を投げ掛けながら訊くと、黒木は髪をくしゃくしゃと撫で回した。

「浮気調査だ」

「……浮気調査つて、まともな探偵業もするんだな」

驚きだ。いつも妙な事件に首を突っ込んで、その関係者達から報酬を貰っている事しか知らなかったが、たまには探偵らしい事もするらしい。

捺夜が炒飯を皿に盛つてきて、俺の隣に座った。

「霊絡みの事件だけじゃなくて、普通の仕事もして下さいって、あたしが頼んだの」

「ああ、だからか。ところで、それで何か不味かったのか？」

「お前には関係無い」

黒木が不機嫌そうにすると、炒飯を食べ始めた捺夜が楽しそうに言った。

「慣れない事をするから失敗しちゃったんだよ、駄目だよねー。あ、晨夜さんの事だから、あたしは関係無いよ」

「うわぁ……」

「俺はたまたま警察官に職務質問されただけだ」

職務質問はたまたまされるものではない。何を開き直っているんだ、この探偵は。

「それで探偵務まるのか。職務質問される探偵つて、馬鹿みたいだな」

「結果往来だ。構わない」

「は？ 往来？ オーライじゃなくて？」

良い結果と悪い結果の何れにしろ、結果がやってきたとでも言うのか。いや、意味は解らないのだが。

「奥さんに依頼されただけど、職務質問の時に旦那さんにばれちゃつて。それで、黙っていてくれれば倍払うつて。だからそれに飛

び付いて、お金貰って今日は奥さんにこの仕事は出来ませんって断ったら怒っちゃった。——あ、炒飯美味しい」

不思議そうにする俺に、捺夜が事の次第を話してくれた。だから結果往来か。良い結果と悪い結果が見事にやってきた訳だ。っていうか、それは間接的に脅迫になっていないか？

「それなら怒られるのは当たり前だ。お前本当にそれで探偵なのか？」

「そんなどうでもいい事は措いておけ。話を戻す。猫を視たんだっただな」

「そうだよ。っていうか話逸らすな」

「だったら俺は探偵じゃない。それでいいな？話を進める」

黒木は急に投げ遣りな風に言った。物凄い腹が立つのだが。

「捺夜、こいつ殴っていい？」

「駄目。一応あたしの保護者なんだから。又エが殴ったら暫らく気絶しちゃうよ」

「何故彼方に許可を求める」

「それは又エが晨夜さんの意思はまるで無視しているからですよ」

あははー、と笑いながら言う捺夜。

「捺夜の許可が降りないなら仕方が無い。よかったな、黒木。捺夜に感謝しろよ」

「……話を、進めていいか」

黒木はげんなりとした顔で言った。

捺夜が炒飯を食べ終わる頃には、猫の話は一段落していた。

黒木は猫の飼い主捜しでもするつもりなのか、件の女子中学生の似顔絵が欲しい、と言った。なので、捺夜に特徴を伝えて似顔絵を描いてもらっていると、途中までの話を整理し終えたのか、黒木は手帳を閉じた。

「さて、お前が見た猫が轢かれた現場の様子を教えてくれ」

「普通の事故。濃いタイヤ痕が残ってた。多分、車は大型車だな、

トラックか何か。……眼は、もう少し大きかったな」

俺が言っと、捺夜が似顔絵を描き直す。大分似てきた。

「濃い、タイヤ痕？」

「そう。轢き逃げだろうな。あ、これだな、これ。こんな顔だった」
似顔絵完成。捺夜が似顔絵を、どうぞ、と黒木に渡す。すると思
い出した様に「あ、そうだ」と手を合わせた。

「轢き逃げと言えば、あたしも見たよ。ガードレールが曲がって
タイヤ痕が残ってた。猫の死体は無かったけど血の痕があったから、
あそこも猫、轢かれちゃったのかなあ……」

「それって、俺が見たのと同じじゃないか？」

「違うよ。あたしが見たのは一昨日だし、繁華街の近くだったもん。
又エのは通学路でしょ？」

じゃあ、別件か。繁華街に通学路と、最近で二匹も猫が轢かれた
のか。

「……同じパターンの交通事故……、か」

黒木は、急に片目を細めた。

「彼方、お前が見たタイヤ痕も、大型車のものだったのか？」

こいつが、こういう表情をする時は、決まって自分の中でだけ、
上手く歯車が噛み合う様な何かを思い付いた時だ。いつもそれを、
まだ可能性だから、と言って口に出さない。そのせいで、正体不明
な目的の行動に、振り回される破目になる。また何を思い付いたん
だか……。

そうですよ、と答えた捺夜も、それに気付いた。

「って、あー！ また晨夜さん、一人で納得してるっ。私達にも教
えて下さいよ」

「まだ駄目だ。口に出すと余計に意識し過ぎるし、勘違いかも知れ
ない。確信に足る証拠が集まってからだ。半端な状況で打ち出した
結論は、推理でも推測でもない、予断にすら劣る妄想だ。そんなも
のは頭に閉じ込め、事実から演繹を行える段になるのを待つべきだ」
不平を洩らす捺夜に、やはり答えない黒木。

「……それは、『俺に視えた猫』と関係があるのか、それとも、『事故』に関係があるのか？」

話の筋から言って、こいつに思うところがあるのは、それだけだろう。猫と事故。この場合は猫が被害を受けていて、大型車に轢かれるというケースが二つあるだけだ。現時点ではただの偶然にしか思えない。

黒木は、捺夜の書いた似顔絵を眺めながら、短く言った。
「両方だ」

猫にも事故にも関わる事柄。俺の見た猫が霊になったのは今日か昨日。捺夜が見たのは交通事故の現場だけで、猫は見えていない。それでも、警察が捜査をした訳じゃないなら、人が轢かれたのではないのだろう。

しかし、大型車がガードレールにぶつかる様な事故は、結構な大事故だと思う。それに関しては、きっとドライバーは逃げているだろうから、もう判らない筈だ。

……大型車？ 運転が職業の、プロが事故を起こしたケースが、こんな短い期間に二つも？ 違和感がある。不自然だが、それを不自然とするなら、猫はどういう位置に置けばいいのだろう……訳が解らなくなってきた。

「黒木、大型車だから調べるのか？」

思い至った違和感を、直接黒木に訊いてみるが、片目を細めただけで何も答えない。やっぱり教える気は無いのか。

「……『解体』は？」

「可能性はある」

「猫相手に出来るのか？」

「さあな。まだ猫を相手にするのも俺には判らない。続きが気になるなら、明日——いや、明後日にまた来るといい」

そう言つと、黒木は懐中時計で時間を確認した。そして、愛用しているらしいフード付きの黒いコートを羽織ると、似顔絵の紙をポケットに突っ込んで、

「——本当に猫、なのか……？」
と、呟いて事務所を出ていった。

五月十五日

——はい、堂崎どうさきです。

え？ 探偵さん、ですか。黒木私立探偵事務所……。何です？
あの子について？ ……えっと、じゃあ中で……。

え？ ここでいい？ はあ、判りました。役に立てるか判りませんけど、じゃあ何でも訊いて下さい。

……はい、そうです。車に轢かれた、みたいです。……何度言っても、夜中に出歩く癖が無くならなかったんです。多分、もう習慣みたいなものだったとは思えないですね。

——あ、すみません。泣いたりして。

どんな子だったかつて？ えっとですねえ……。癩癪持ち、みたいなところがありましたね。

思い通りにいかないと、暴れ始める様な感じです。あ、はい。そうですね、だから秘密であの子——アリサを飼ってましたね。

事故の様子を知っているか、ですか……？

はい、一応。他の人に聞かせてもらったから。事故の様子、というより、あの子の様子ですけど。頭の後を強く打ったみたい、と聞きました。即死だって聞いたけど、せめて、苦しんでいないといいいです。

え？ あ、はい。そうですね、事故の起こった後に人から聞きました。余り、思い出したくないです……。

犯人？ はい、捕まりはしましたがけど、思ったよりも罪は軽くなるみたいです……。

もっと重い罪で償ってほしいと頼んだんです……だけど、検事さんはちゃんと取り合ってくれませんでした、無理だ、って。友達の長谷君はせも手伝ってくれたのに……、私達だけでは、駄目でした。

首輪、ですか……？ あれは、形見の一つの様に思っています……。あ、いえ。返してもらえれば構いませんが、ちよつと待ってもらってもいいですか。今持ってくるので。

あ、いえ。えつと、そんな、有り難うございます。あの子も浮かばれると思います。

五月十六日

「——で、色々と見たり聞いたりで、何が判ったんです？」

彼方が訊くと、昨日、一昨日と色々調べていた晨夜は、徹夜のせいで隈が出来ている眼を擦りながら、ソファから起き上がった。

「ここ最近の猫が死んだ交通事故は、全て一つの事件だという事だ。それと三ヶ月前から猫の死体回収率が上がっていた」

「はあ、そんな事まで調べられるんですか」

彼方は晨夜の手腕に感心する。しかし、それは真面目に探偵業に従事すれば、かなり優秀なのだという事でもあるので、不満も抱いた。

「……晨夜さん。趣味でそういう調べ事するのはいいですけど、ちゃんと働いて下さいね」

晨夜は眠そうに顔を押さえて、バツが悪そうに彼方を見る。

「今は大丈夫だろう。まだ前回の報酬もある」

「あたしは晨夜さんの生活を安定させたいんですつ。全く、どうして又エが視る度に、それこそ他の仕事をすっぽかしてまで調べるんですか？ それに、今回は猫だし」

晨夜はいつも霊——彼はそれを虚有きょゆうと呼んでいるが——の話聞き付けると、それを最優先にして仕事をしなくなる。普通の探偵業をしない晨夜が、一体どうやって自分の給料や生活費等の金を捻出しているのか、彼方には未だ謎だ。

たまに霊絡みの事が大事件に繋がり、それを解決する事で関係者に報酬を貰っている事から、一部では奇怪な事件専門の探偵、と有

名らしい。確かに、その時の報酬の桁が凄い事もしばしばあるが、彼方には霊に関してのワーカホリックにしか見えない。

しかも、今回の霊は人ですらない、猫だ。何に興味をそそられ、事件性を見出せるのか、さっぱり判らない。

「——それは、俺も聞きたいな」

考え耽つてしていると、彼方の耳に聞き慣れた声が届いた。

「あ、又エ。結局続きが気になって来たんだ」

一昨日晨夜に言われた通りに、又エが来ていた。高校の制服を着ているので、放課後直接ここに来たのだろう。

「だけど、もう高校終わる時間になってたんだ？」

時計を見ると、まだ高校の授業は終わっていない。サボつたらしい。ああもう……素行不良生だなあ、と諦めにも似た気持ちを抱きながら、彼方は肩を竦めた。

「うん、まあ。で、何でお前は俺が視たものを毎回調べるんだ？」

いつもやる『解体』だって、お前には何の意味も無いだろ？」

その彼方の様子に気付いているのか、いないのか、又エは堂々と嘘を吐き、彼女の隣に座った。

「単なる知的探究心だ。『解体』はその結果だ」

晨夜の返事は答えになっていない。

又エは隣で呆れた様に、答える気は無いんだな、と溜息を吐く。

「まあ確かに霊を調べてたら、『解体』をしないと殺されるかも知れない事は多いからな。関わった以上は回避出来ない事、か」

(……『解体』、かあ)

彼方は心中で呟いた。

『解体』というのは、存在に必要な矛盾理由——パラドックス霊に於いては未練——を、何らかの形で消す事だ、と彼方は聞いている。実際に『解体』に立ち会った事が無いので、それがどういふ事かはよく解らないが、晨夜が言うには『矛盾理由に対する詭弁』パラドックスらしい。

晨夜曰く、霊は存在理由——レゾンデートル即ち矛盾理由——が一つしか無いと言う。それが未練で、心残りを為そうとするので心靈現象というも

のが起きる。それは視えないからこそその奇々怪々な現象で、又エの様に視える人や、理屈が解る人からすれば、心霊現象というのは、人為的なものに成り下がる。

（それでも、あたしからすれば、ベクターとか怪訝しい事がいっぱいあるんだけど）

そう、人為的と言うには不可能な事が引き起こされている。

「そう言えば晨夜さん、何であたし達が霊を視れないだけで、人為的な行為が心霊現象になるんですか？」

幾らそれに『媒介者^{ベクター}』という名前が与えられ、視えたとしても、理屈が解ったとしても、彼方には心霊現象全般が、人為的な事には思えない。

「質問の意図がよく掴めないな……… どういう事だ？」
逆に訊き返された。

「……えつとですね、上手く言えないんですけど。あたし達が心霊現象を心霊現象と呼ぶのは、理外だからですよ？ でも、又エの様に視える人からすれば、それは人為的なものになると晨夜さんは言いました。だとすると、実行者が居るのならば、そしてそれが人為であるのならば、それは理外では無い様な気がする……… うーん、やっぱり上手く言えません」

「いや、そういう事なら簡単だ」

彼方自身も、頭の中が整理の付かない状況になっていると、予想外に晨夜は今の説明で理解した。

「それは言い方の問題だ。無がボールペンを動かしても、俺達にはそれは認識出来ないだろう？ そんな事は起きないのだから。つまり、視えないというよりも、認知出来ないと言う方が近い。それが結果的に視える視えないという話になるだけだ」

「認知、ですか？」

耳慣れない言葉だ——確か、対象を認識してそれが何であるかを判断する事、だった気がする。それがどうしたのだろう、と彼方が考えていると、又エが会話に入ってきた。

「認知ってどういう事だ？ あ、ドラマとかで親が子供を戸籍で認めるのかという奴だろ」

「阿呆」

「あ、アホって何だ！ アホって！」

「俺が今言っているのは後頭葉の機能の事だ」

又エが「そんなの知るか！」と、喚いているのを横目に、彼方は話を戻す。

「……えっとじゃあ、あたしと晨夜さんは又エと違って、失認状態なんですか？ 又エは脳の使われてない機能を使えてる、とか」

晨夜の言う、認知出来ないという話だと、別に視えない訳ではない。それこそ失認——見えていても判らないという事になってしまうのだから、誰にでも霊が見えてはいる事になる。

「別に俺や彼方の後頭葉に障害があるという訳ではない。知覚出来てから初めて認知に繋がるんだが、虚有——霊という呼称の方がお前等には話し易いか——は存在しない筈の存在だ。だから霊という対象を知覚して、それが何であるかを理解する認知が問題になる。

それに認知と言っても脳の機能は関係無い。霊を知覚して認知出来る存在と、出来ない存在が居るだけで、認知が出来ない事が普通だ」「つまり、霊の認知が出来る又エの方が怪訝しいんですか？」

又エは、怪訝しい、と言われ少し顔を顰めた。

「怪訝しいというよりも……仮説はある」

そうだな、何処から説明するか——晨夜は言った。

「世界に不適應するとベクターを持つ——という事から説明するか」「不適應って、何だ？」

又エが怪訝そうに言う。その隣で、彼方は考えを巡らせていた。（不適應……世界に適應していないって事？）

ベクターを持っているという事がそうなのだろう。ならば適應しているというのは、ベクターを持っていないという事だ。

だとしたら、又エはどちらになるのだろうか。

霊が視えて、それでいてベクターを持っているから、普通、とい

う訳ではない。かといって、霊の様に死んでいて、不適應とされているモノとは何処か違う気がする……。

(……駄目、訳解らなくなってきた)

彼方は観念する事にした。

「えーと、結局、どういう事です？」

「例えば、ホラー映画によく出るだろう。ラップ音、ポルターガイストに呪いという類が。生前はただの人間だったのに、死んだらあんな能力を手に入れる事が出来るというのは、怪訝しいとは思わないか」

ああ、確かに——と又エが言った。

「でもアレは飽くまで創作上の話だろ？」

「創作だとしても元々のモデルがあるからこそ、ああいう話が出るんだ。映画自体はフィクションでも、昔から人々の間で語られてきたものはノンフィクションの中にモデルがある。想像の基盤は常に現実で、エピクロス曰く『たとい神意によるとも無からは何ものも生ぜず』だ」

「実在するからこそそのモデル、ですか」

現に、彼方はそういった事件に遭遇しているのだから、それを否定は出来ない。という事は、映画に登場するもの——ラップ音、ポルターガイストに呪い等々——にはモデルがあつて、それこそ、長い時間を経て個々の想像力で色んな派生がされていて、原形を留めていないとしても、大元にはモデルとなるものがあるのだ。

「そうだ。そしてベクターは世界に不適應しないと持ち得ない。俺達存在というものは、世界が進む方向によつて進化とも退化ともいう適應をして、生きているからだ。だが不適應した奴等は現状で顕れない筈の、ある可能性の媒介であり、その方向を持つ者——つまり、媒介者という事になる」

「退化、ですか？ 現代のあたし達からすれば、ベクターは超能力になりますよ。何でそれが退化になるんですか、寧ろ進化としか受け止められませんよ」

例えばポルターガイストにしても、騒霊と書くが要は念動力だ。それをどうして退化と言えるのだろう。

「それが間違っている。当然として受け止めている現代の認識が前提にあるから、そう思い込んでいるだけで、環境が変われば認識も変わる。進化や退化というのは便宜的な方便だ。俺達からすればテレパシーが超能力だと思われる様に、会話という声帯の振動を使う物理的な意思疎通能力が、超能力としか思えない環境も可能性としては存在する。まあ、殆ど宇宙開闢の次元で語る並行世界染みた考え方だ。とにかく、存在は世界で変化するという事が、世界の適応という事だ」

進化論みたいだな——と又エが呟いた。

「あ、でもあれは積み重ねる様な考え方だから違うか。お前の言う世界の適応の話だと、基本形から自在に変化するから——存在は全てベクターを持つ可能性を備えてるって事になるんだな」

「ん？ だったら又エの場合はどうなるの？ 視える事——霊を認知出来る能力はどう分類されるんだろ」

又エにはエラン・ヴィタールというベクターがあり、それがアルビノの体質を無害化していると言う。だが、それと霊を認知出来る能力とは別物だとも言っている。

ベクターと分類するにしても、どんな世界の適応だろうと、霊が居ないという状況は無くならないと考えていいのだから、逆説的に霊の認知は当て嵌まらない。

彼方がそう訊くと、晨夜は言った。

「霊は死んだから、存在が一度終わったからこそ不適応しているが、霊を認知出来る奴等も、ベクターを持ち、適応から外れている事は確かだ」

例えば——と晨夜は又エを見た。

「俺は林檎を片手で潰す事は出来ないが、お前は楽に出来るだろう？」

「え、まあ、やった事は無いが多分」

多分どころか、彼方は又エが鉄の棒を握り潰したところを見た事がある。

「大の男でも一定以上の筋肉が無いと出来ない事を、見た目からしてそんな筋肉が無いお前は出来る」

「まあ、それが？^{エラン・ヴィタール}生命の躍動？だしな」

「そこだ。お前には、お前の持つベクターが性質としてある。彼方、性質とは何だと思う？」

「え？ 性質、ですか？ えっと……原子の組み合わせですか？」

彼方の答えに晨夜は軽く頷く。

「大雑把に言えばそうだ。では、その原子とは何だ？」

「原子核と電子の集まり、ですね」

「では、原子核と電子とは何だ？」

「ええ？ えっと、その……これってソクラテスとの問答か何かですか？ そんなの解りませんよ、もうっ」

彼方は困った様に口を尖らせて言う。晨夜は、それに口角を僅かに上げながら答えた。

「別に反駁的対話をする気は無い。正解は素粒子だ。ハドロン、レプトン、ゲージ粒子に大別される。こうして分割していくと、終わりには最も根本的な世界という次元での最小構成要素が在るだろう。それが『ヒト』を構成した時に異能が現れるのが、^{ベクター}媒介者だ」

「……は？ いや、意味が解らない」

間の抜けた調子の又エの言葉に、晨夜は嘆息した。

「つまりだ、俺達はただ、この世界では？^{ホモ・サピエンス}文明の安楽椅子？に座しているヒトであり、^{ベクター}媒介者は完全に別世界の法則のヒトだという事だ」

「又エには、エラン・ヴィタールというベクターが性質としてある、って事ですよね？ それが、霊にどう関わってるんですか？」

「この世界から外れた存在として、霊と同類という事になる。^{ベク}媒介者と霊の違いは、存在の不安定さの有無だけだが、それはまた違う枠での話になる。まあ、それがベクターへの性質の転化の原因では

あるとだけ言っておこう」

晨夜が話に区切りを付けようとする、そろりと又エが手を挙げた。

「済まん、全然解らない」

「……何処から解らないんだ」

「……………原子の辺りから」

晨夜は思い切り溜息を吐いてから言った。

「^{ベクター}霊と媒介者は、世界からずれた存在同士だから視る事が出来る。もうそれだけでいい」

又エは「世界からずれた、ね」と、頷きながら何処か自嘲気味に言った。

「^{アルビノ}色素欠乏でベクターを持つ世界からずれた存在……中々に戯れている存在だな、俺も」

ベクター一つで充分なのに——と独り言の様に又エは嘆息する。

ちらりと彼方は横目で又エの姿を見る。真つ白なストレートヘアに、呉藍^{くれない}の眼。髪と同様に雪の様に白い肌という容姿は何処か、浮世離れしている。あたしからすれば、この容姿が既に超能力みたいなものなんだけどなあ、と益体の無い感想を抱いた。

「ところで、猫に関わる事全て判ったらしいが、それでお前は何かをするんだ？ 霊になった猫から何か判ったのか？」

又エが捨て鉢気味に訊くと、

「いいや、猫の霊について目新しい事は何も無かった。ただ、猫は被害者だ。犯人の所には行く」

晨夜は片目を細め、言った。

「相手は、歴とした人間だ」

黒木が犯人の所に行くと言い、それには見える俺が必要だって事で、俺はバイト代を貰うのを条件に協力する事にした。

南川駅の高架下が目的地らしく、先刻からすっかり暗くなった高架下沿いをずっと歩いている。高架下隣には道路が通っていて、ヘッドライトを点けた車が走っている。その歩道を歩いているのは俺と黒木だけだ。

危険かも知れないって事で、捺夜は黒木が事務所で留守番をさせているのだが、それは俺が危険な目に遭うのは構わないって事が。いや、バイト代に釣られたのは俺だが、もう少し配慮の様なものがあったても、いいんじゃないだろうか。

目的地に向かう最中に、黒木が事件の概要を説明し始めた。

「猫を殺した犯人は堂崎美和子だ」

「……誰？」

そんな名前は今までに一度でも出てきたか？

「俺が、心当たりすら持たない相手に、唐突に人名を挙げると思ってたか？ 記憶を探れば思い当たる事だ、少し考えれば解る事だろう。それに、この事件について思索すれば、該当する人物は一人しか居な」

取り敢えず蹴った。

「——っ、お前が遇った、女子中学生だ。一昨日、聞き込みをして、話を聞きに行った時に判った」

黒木は、俺に踵で蹴られた脛を、痛そうに引き摺りながら答えた。
「それで？ 何であの子が犯人になるんだ」

こいつはあの女子中学生——堂崎美和子に話を聞いただけで、事件の全貌を明らかに出来たというのか。それとも、話の中で犯人だと確信する事があったんだろうか。

「あの子が飼い猫——アリサ、だったか——の飼い主だったからだ」

黒木は素っ気無く言った。

「だった、って……自分の飼い猫を殺したって言うのか？　俺が見た感じでは、あの子、猫の事を凄いい心配していたよ。今はペットを家族同然に思っている奴だって居るんだ。そうじゃなくても、簡単にペットを殺すか？」

それに、こいつの説明だと、堂崎が他の猫を殺す理由が無い。仮に、堂崎がアリサを簡単に殺せる程の理由があつたとしても、他の犯行の動機にはならない。

俺がそう反論すると、黒木は言った。

「堂崎美和子は、高架下で親には秘密でアリサを飼っていた。そして、アリサを簡単に殺せるから犯人になる」

「……どういう事だ？　アリサを殺す理由が、他の猫を殺す理由に繋がるのか？」

「いや、アリサを殺す理由が他の猫の事に直接繋がるという訳ではない。結果的にそうなったというだけの話、だろうな」

黒木は断言せずに、片目を細めて予断した。これ以上は話す気が無いって事か。

「……他には？　一昨日聞き込みしてたんなら、昨日は何してたんだ？」

「事故現場を調べて回っていた」

「何か判ったのか？」

「事故は全て同じものだった、という事だ」

「いや……、それは捺夜から聞いた話で判っていた事だろ」

猫が大型車に轢かれたという交通事故が、この話の原点にあつた訳だし。俺が見た交通事故跡と捺夜から聞いた事故の話は、どう考えてもケースとしては同じだ。他の例も調べていたとして、ケースとしては似たり寄つたりのものしかないんだから、事故は同じものとしてしか扱えないだろう。

「ここだな」

黒木は高架下のフェンスで囲まれた空き地の前で立ち止まった。

俺の疑問に答える気は無いらしい。

「……で、俺にどうしろって言っただ？」

わざと不満気な声で言ったのにも拘らず、黒木はそれを気にも留めなかった。

「お前の出番はまだだ。ここにはアリサが飼われていた跡がある。そこに、堂崎美和子は現れる」

「——あつたぞ」

アリサの小屋は高架の支柱の近くに、ちんまりと建てられていた。その住処は、明らかに誰かが造ってやったもので、それが誰かは考えるまでもない事だった。

成程、これがあるから、黒木は俺をここに連れてきたんだろう。ここに堂崎が来る理由だ。猫を飼っていた跡。堂崎が気に掛けている、アリサの事、か。

三毛猫のアリサを搜していたから、他の猫と接触し——何故か殺した。しかも交通事故になる様に車に轢かせて、か。

戯^ざれた事を、するじゃないか、堂崎美和子……。

思わず、手を強く握りしめていた。

「あとは待機する。向こうが猫に会いに来るのを待つだけだ」

俺の心中など知らずに、黒木は何の気も無しに言う。こいつの性格上、察したとしても何も言わないだろうから、仕方が無いんだが。隣の道路の車は、ちょうど向かいから来る様になっている為、ライトが眩しかった。放射状に広がるライトの明かりは、隣を通り過ぎる度に消えていく。

高架下は電車が通る音も響き、車が通ると重なると豪い騒音になる。煩過ぎる。耳がきん、として頭が麻痺する様な錯覚を覚える。騒音に苛立ちながら、それでも何台目か憶えていないライトに眼を細めた時だった。

「あれ？ あの時」

光の跡に、堂崎美和子が、不思議そうに俺を見ながら立っていた。

「——黒木、来たぞ。どうするんだ？」

黒木は一言、そうか、と言って堂崎の前に立った。

二人は奇妙な距離を保っている。中途半端な、会話するには適していない隔たり。

「初めまして、堂崎美和子」

唐突に話し掛けてくる黒木に、堂崎は戸惑いを見せた。当然か、知らない人に急に話し掛けられれば、誰だってあんな顔をする。

「お前は、猫を殺しただろう？」

率直に黒木が訊くと、堂崎の顔色が変わった。

「……なっ、何の、事」

「お前はアリサを捜していた。だが、いつもお前が見つけた猫は、アリサじゃなかった」

「何、言ってるのか判らない」

堂崎は目を逸らして俯くが、黒木は無視して続ける。

「いくら頑張ってもアリサは見つからなかった。街の到る所を捜したと思う。だが、全く見つからなかった。思い通りに行かなくて苛々しただろう」

「なに……何でそんな事知ってるの……？ 何でそんな事言つの？ 訳解んない。貴方、誰？ 何者？ 何を何処まで知ってるの？ アリサの事知ってるなら教えてよっ、あたし——もう嫌なの。猫を殺したくないっ」

黒木は声を震わせる堂崎の方を一瞥して、少し間を置いてから言った。

「そうしてお前は癪癪を起こして、怒りに任せて猫を殺してしまっただんだと、俺は思う」

「——るさい」

微かに、堂崎が呟いた。

「そんなの、あたしのせいじゃない。殺したくなかったけど、仕方無かったのっ。自分でも抑えられないんだもんっ、勝手に、勝手になっちゃうだもんっ！」

「それで毎回、猫を見つける度に、それがアリサでなかったら、そのまま怒って殺してしまった」

淡々と、堂崎の動揺も気にも留めずに、追い詰める様に黒木は語る。

「だからあつ！ あたしが悪いんじゃないつ。勝手に、どう仕様も無いんだもん。抑えられないんだから、どうにも出来ないじゃない！！ やだ、もうやだつ。何でそんな事ばっか言うの？ 何なの、黙ってよ。言われなくても判ってるつ。だけど、どうにも出来ないの！！」

また、ライトを点けた車が向こうから来た。光を背にしている為か、俺には堂崎が影法師の様に見えた。

堂崎が声を荒げているのに対して、黒木は淡々としている。

「お前は、猫を殺す度に自分のした事に動揺しながらも、猫を見つけると——殺してしまっただ」

「——煩いつ！！」

怒声と同時に、堂崎の後ろで轟音が響き、スリップ音と、巨大な質量が近付いてくる振動が地面から伝わってきた。光がこちらに向かってきて、それがあつという間に大きくなる。トラックだかダンブカーだか判らないが、大型車がガードレールとフェンスを吹っ飛ばしてこちらに來ている。それだけは判った。

あの車は俺達は轢き殺そうとしている。

「——」

俺は轢死しそうになっているのというのに、何故か妙に落ち着いていた。俺は轢かれた程度じゃ死なない、そう思っていたのもあるんだろう。現実感が無いっていうのもある。だが、車に轢かれるなんて事よりも、黒木がそれを見越していたかの様に、俺の体を抱き抱えて車を避けられた事に——何よりも動揺していた。

車は高架の支柱に突っ込み、爆発の様な音がして、そのビリビリとした空気の振動が、こちらにまで伝わってきた。

耳がきん、とする。

頭が麻痺している。

本当に、頭が働かずに混乱している。何が起こったのかなんて、愚問だ。車が突っ込んで来た、それだけなのだから。そんな事よりも――堂崎が事故を引き起こしたのが間違い無くて、それが解っていたのか、避ける事の出来た黒木の方が、余程、意味が解らない。

「――やはり、ベクターは『再現』か」

すぐ近くの事故に目もくれずに、黒木が呟いていた隣で俺は茫然としか出来なかった。

「何なの！ 何お前ツ、煩い！ 死ね！ 車に轢かれてグチャグチャになっちゃえ！」

暗い高架下で少女が地団駄を踏んで、辺り構わず怒りの言葉を吐き散らしている。

「無事か？」

「え？ ああ、無事だ」

俺は訳も解らず、ただ答えると、

「よし、じゃあ堂崎美和子が何処に居るか教えてくれ。俺には視えないからな」

「――は？」

黒木の言葉を理解するのに暫らく掛かってから、

「じゃあ、あいつは」

「気付かなかったのか？ そうだ、堂崎美和子は死んでいる」

その事実を、聞く事しか出来なかった。

「こんなつ、こんなの、あたしだって好きで殺したんじゃないつ。

勝手に？ 往時の隠頭レゼンダント？ が再現しちゃうんだから仕方無いじゃん！

あたしの過去がなぞられるのをあたしが止められる訳無いじゃんかあ！ こんなの、判ってるのに、訳解ちからんない能力のせいだ！！」

堂崎は変わらずに、激情のままに何かを罵り、癇癪を起こしている。先刻と立っていた位置は変わっていない。

「……あそこ」

俺が指差すと、黒木は無言で再び堂崎の前に立った。

二人は奇妙な距離を保っている。中途半端な、会話するには適していない隔たり。

遠くに車のライトが見える。段々と大きくなってきていて、こっちに近付いてきているのが判った。また、大型車だ。

「もうやだ！ 皆、あたしみたいに死んじゃえっ！！」

再び車が、小さな少女の怒りに動かされる様に、先刻の車の過去をなぞる様に、突っ込んできた。予め記されたシナリオを読む様に、寸分変わらず先刻と同じ軌跡を描く。

だが、黒木はそれを意にも介さず、着ているコートから丸い輪の様な物を取り出した。

「これが解るだろう」

それは、少し赤黒く汚れたペット用の首輪だった。そして、黒木は首輪を堂崎に見せ付ける様に突き出して、

「お前は、既にアリサも殺してしまっているんだ」

それだけを、はつきりと言った。

「え？」

車は急になぞる事を止め、黒木と呆^{ぼう}としている少女の間に入って、その姿を掻き消した。

それから、辺りを見回して堂崎の姿を捜したが見つからなかった。

黒木に、世界に存在する為の矛盾理由^{パラドックス}を『解体』されたのだろう。

本人がそれを理解したのと同時に、世界^{こゝろ}から消えた。

突っ込んできた車の運転手は二人とも無事で、エアバックに体を預けて気絶していた。面倒な事になる前にと、黒木はさっさと電話で救急車を呼んで、帰ると言い始めた。

「あいつの矛盾理由^{パラドックス}って何だったんだ」

俺は帰り道で黒木に訊いた。

「アリサだ」

「それは判る。でも、何でアリサも含めて、猫を殺してたんだ？
アリサを殺した時点で、世界に残留する理由は無くなったんだろう

？」

多分、堂崎は飼^{アリサ}い猫の事が気掛かりなまま死んだんだろう。だから霊になった時にアリサを捜す事だけが、世界に存在する為の未練^{パドックス}——矛盾理由になった。だが、堂崎は自分で理由^{アリサ}を失くした。それにも拘らず、霊として存在していて、猫を殺していた。

「それは、死んだ時の事故が原因だ」

黒木は俺の方を向いた。

「あの子は、後頭葉を損傷して霊になった。だから、認知障害——恐らく、相貌失認の様になっていたのだろう」

「そうぼう……何だつて？」

「相貌失認。要は人の顔を憶えられないという事だ」

認知出来ない、と。猫を、自分の飼^{アリサ}い猫を——

「いや、待てよ。それじゃあ霊は、生前の死因を引き摺ったまま霊になるのか？」

交通事故の時の怪我を、霊になってからも引き摺っているなら、霊になった途端にまた死なないと怪訝しい。

「いや、確かに、霊は死因を引き摺らない。死因が無かった状態に戻っている。だが、堂崎美和子は後頭葉を損傷したから死んだのではなく、後頭葉を損傷した後に死んだ。死因ではないから、霊になっても死なない程度の脳の損傷を引き摺った」

「……………」

なら、そんな、微妙な違いで堂崎は——。

「三毛猫という特徴だけでは、アリサをアリサと判別出来なかったんだろう。彼女は、三毛猫のアリサを捜しても、一生アリサと認識出来なかったんだ」

「……何で、あの子のベクターが解ったんだ？」

「事故を調べたからだ。タイヤ痕、弧の描き方、衝突位置——何から何まで、全て同じだった。どう考えても『再現している』としか判じられない。そんな事、調べなければ気付かない事だろうな」

——何か判ったのか？

——事故は全て同じものだった、という事だな。

「あ——そういう」

『再現』だと解っていたから、あの時俺を抱えて車を避ける事なんか出来たのか。……やっぱり、助けられた事は礼を言うべきだろうか。あの程度じゃ俺は死なないと思うが、普通なら一応、死ぬところだった訳だし。

「そう言えば……、お前に助けられたな。礼は言っておく、有り難う」

何だか気恥ずかしくて適当に目を逸らしながら言っと、黒木は溜息を吐いた。

「その言葉遣いはどうにかならないのか？」

「……もう定着してるのに、どうしろって言うんだよ」

「お前は女なんだ、夜鳥^{ぬえ}」

「……煩い、ばーか」

黒木から顔を背けて、日が替わり掛けている空を仰いだ。

堂崎は、霊になってから誰にも気付いてもらえずにいなながらも、ずっと話を訊いて回っていたんだろうか。

誰かに話を訊こうにも無視されて、孤独で、アリサの事が心配で堪らず、三毛猫^{アリサ}を捜しても見つからず、訳の解らない能力^{ちから}で猫を殺してしまった。そんな中で、俺に初めて相手にされた堂崎は、どれだけ嬉しかったんだろうか。

そして、あいつの最期は自分がアリサを殺したと知った時。絶望しただろうか、それとも安心したのだろうか。あの刹那の、消える寸前に全てを理解した表情からは、俺は何も読み取れなかった。

一つのヒトが終わる瞬間を視たのに、何も感じない。ああ、そうだろう。俺は何処かで冷徹に死を殺したいと思っているから。奪命^{だつめい}に、矛盾理由^{パラドックス}を抱く。

今日は朔の月だったのか、仰いだ空に月は見えなかった。

俺は何故か——酷く安堵した。

五月十七日

「そう言えば、いつから堂崎が霊になってるって気付いたんだ？」

高架下から事務所に戻る最中に、ふと思った事を訊いてみた。

「聞き込みに行った時だ。似顔絵を見せて回っていると、堂崎さんの娘だ、というから母親に話を聞いた」

「交通事故で死んだっていうのも、その時に聞いたのか」

「そうだ。堂崎美和子は親がアリサを飼う事を許してくれないから隠れて飼っていて、夜に家を抜け出す様になっただけ。尤も、母親は事故の後に猫を飼っていた事を知った様だが。猫のアリサ自体も、母親は警察に届けたりして捜していたが、その前に堂崎美和子が殺してしまった。その時に、アリサの首輪と遺体を引き取ったそうだ」

じゃあ、堂崎の母親は、自分の娘が殺した、娘の飼い猫の首輪を持っていたのか。

「……戯^されている」

俺の呟きが聞こえているのか判らないが、黒木はそのまま話を続けた。

「堂崎美和子は、大型車に轢き逃げされたが、それは深夜の事だったのに加えて、野次馬達が来るのも遅く、誰にも気付かれないで死んだ。あの子の『再現』は、そこから来ているんだろ」

「それと、その時に認知障害になったんだ……。あれ？　そう言え、俺の事はちゃんと判ってたが、あいつ」

「お前は馬鹿か。お前みたいな容姿だったら、判別が付くに決まってるだろう。そんな派手な特徴を持っている奴は他に居ない。自分の特徴ぐらい把握しておくべきだ」

「あー、成る程」

まあそれが、この容姿の利点でもあるのだが。それよりも――黒木が呟いた。

「琐事だが、一つだけ気になる事がある」

「何？」

「あの子が言っていたレーゼドラマという言葉がな。あれは、『読むだけの戯曲』を意味するドイツ語だ」

勝手に再現してしまう、と堂崎が言っていた言葉。

「それは——能力ちからの名前だろ。ベクターにも名前がある。多分、存在しているからだろ？」

それだけは、俺は確信を持って言える。俺も同じ様に？生命エラン・ヴィタルの躍動イル？というベクターを持っているから。いつから持っていたのか判らないが、何故か完全に理解出来ている能力ちから。

黒木は、ふむ、と納得した様に片目を細めた。

「それはお前も同じなのか？」

「そうだよ。？生命エラン・ヴィタルの躍動？の元ネタなんて、俺は知らない」

「成る程な。名物学の様だが、全ての存在には名が在る、というのはやはり原則としてあるのか。いや寧ろ、これはロゴスか」

「原則、か」

堂崎が読まれる為の戯曲レーゼドラマの様に過去を再現する可能性は、死んで世界に不適應したから持ったというのに、それに付く名前が、存在の原則で適用されたものというのは皮肉だ。

終わってから、自分の過去を世界に顕せる様になった、堂崎の人生としての戯曲ドラマは、誰に読まれる為のものだったのだろうか。

「……少なくとも、無意味な事じゃ、ないよな」

「何か言ったか？」

「何でも無いよ。——ん？ 何だ、あの人集り？」

事務所近くの路地に人が集まっていた。よく見ると、警官が野次馬を制して、黄色の立ち入り禁止のテープが張ってある。

「……何だと思う？」

「俺に訊くな。判る訳無いだろう——と、彼方が居る。話を聞いた方が早そうだ」

黒木の言う通り、野次馬の中に捺夜の姿があった。何か、一生懸命に覗こうとしている。近付いてみると判ったが、どうやら路地裏

で何かがあつて、それを警官が調べているらしい。結構な人数が居るから、大きい事件の様だ。

「何かあつたのか？」

黒木が後から訊くと捺夜は振り向いて、「あ、二人ともお帰りなさい」と言つた。

「殺人です、殺人。また出たらしいですよ」

捺夜は少しばかり興奮しながら、

「――？四肢狩人^{ししかりうど}？が」

と言つた。

速水健司^{はやみ けんじ}は彼女に一目惚れした。

彼女を見た時に、世の中には本当にそんなものがあるという事を、自分自身で思い知った。街で彼女を見た時に、見惚れたまま歩いていたから、ポリバケツに突っ込んでしまう程なのだから。その後も彼は見惚れていた。

忘れられる訳も無い、街で初めて彼女を見た時の事。もう健司にとって、その日は一種の記念日と化してきている。彼女の雰囲気や容姿は一目見た時から忘れてない。いや、忘れられる訳が無いのだ。もしかしたら、向こうもこっちの事を好きだったりするんじゃないか、とも思っている。一目惚れというのは、何だか遺伝子とかそういうもので、互いに魅かれ合うとかいう話を健司は聞いた事があるからだ。自分の遺伝子に彼女が魅かれる可能性というのは、十分にあると思っている。

「……へへっ」

中学の帰り道に一人でそんな思索に耽っていると、思わず顔がにやけてしまう。

彼は十五歳。

所謂、『思春期』というあれこれと考えてしまう年齢だった。あの出遇いを『運命か?』と問われれば、彼は即答で『イエス!』と答えただろう。

頭の中で、健司はここ最近、ずっと彼女の事ばかり考えている。彼女の笑顔や、怒った顔や泣き顔……。色んな事を頭の中で考えては、更に顔はにやける。

そのせいで授業中に怒られているのを、中学の同級生は馬鹿にするが、彼からすれば馬鹿なのは向こうの方だ。彼女の事を知らないなんて、不幸な奴等だなっ! ——そうは思っても、健司は彼女の事を教えるつもりは更々無いのだが。

だが、彼は一つだけ悩んでいる。

以前に遇ってから、彼女と一度も遇えないのだ。この街の何処かに住んでる事は確かなのだが、遇えない。判っているのは、彼女が山瀬高校に通っているらしいという事だけだ。以前見た、あの制服には間違いが無い。近所で山瀬高校に通っている人が、あの制服を着ていた。

適当に街を彷徨っても見つけれない。彼女の行動でも判れば別なのだろうが、街で一回遇っただけでそんな事が解る訳も無い。

そう、だから——もっと直接的に捜すしか無い。

五月十三日

それから、思い立って数日後の昼。健司は山瀬高校の正門前に、やや緊張しながら立っていた。

「……………」

何故だか、気後れする。

小遣いを使ってネットで制服を手に入れたのはいいが、これで怪しまれずに校内に這入れるのだろうか、と不安に思っていた。体格や顔付きは高一と言えば誤魔化しが利きそうだが、どうしても後ろめたさで躊躇ってしまう。

いや、平気だ、と彼は悪い考えを振り払う様に頭を振る。すぐに用を済ませて校内から出れば気付かれる訳が無い。何よりも彼は制服を買う為に、なけなしの貯金まで使ってしまったのだ。学校もサボってまったし、ここで引き下がれる訳が無い。まだ名前すら知らない彼女の情報を手に入れなくては、ここまで来た意味が無くなる。そう、昔の事はもうどうにも出来ない、先に進むのに必要なのは『今』だ。それを無視しても仕様が無い、それでは本末転倒だ。とにかく、彼にとって大事なものは現状なのだ。

直情的な考え方だが、正しい事は正しい。その素直さを発揮する場面を間違えてはいるが、今の彼には、自分本位な正当性を持ちた

い若氣も手伝っていた。

「よしっ、行くぞオレ」

自分を鼓舞する様に、健司は正門を通った。

「——あ、二年の暁先輩あかつきでしょ？」

拍子抜けする程、知りたい事はあっさりと判ってしまった。

校舎に這入ってから出来るだけ平静を装って、一番怪しまれないであろう高一の教室を回って話を訊いてると、数人目の女子生徒で答えが返ってきた。

（いや、確かに目立つ姿だったけど、ここまで簡単に判ると逆に力が抜けんな……）

しかし、これで判った情報は大きい。彼女が二年生だとしたら、健司と彼女の歳の差は一、二歳。もしも、自分が来年ここに進学すれば、彼女と同じ学校で生活出来る。

そんな不純的純粹さで彼の高校の進路は今決まった。今から考えるだけで顔がにやけそうになる。

すると、彼を見ていた女子生徒は意地悪く微笑った。

「何、もしかして告白でもするの？」

「は？」

「勇気あるねえ、君も玉碎しなければいいけど。まだ入学してから一ヶ月かそこらだけどさ、私が知る限りでは暁先輩に挑んでいった男子は皆駄目だったんだよねー」

「い、いや。そ、そんなじゃないですよ」

突然、告白の話になり戸惑いながら答えると、相手は更に調子に乗った。どうやら、噂や詮索が好きな性質たちだった様だ。その上、健司が告白すると決め付けてるとはいえ、言葉に容赦が無い。新しい話の種を見つけて面白がっているのだ。

「恥ずかしがらない恥ずかしがらない。でも、振られても悲観すんなよー？ 暁先輩あかつきってさ、うちだけじゃなくて、他校の女子にも人気あるし、男子には觔木先輩きんぎの次ぐらいに人気あるからねえ。しか

も二人ともさ、けんもほろろな態度だし。あの二人はレベル高過ぎだよなぁ……もう観賞で満足してる人も居るしね。知ってる？ 写真とか撮ってるらしいよ？」

「や、だから違いますって。関係無いですって。ああもうっ。それじゃ、失礼します！」

健司は矢継ぎ早に言う相手に、焦ってその場を離れると、

「あはは、頑張ってるねえ」

後から、何も解ってくれてない声が聞こえてきた。

二年生の教室がある別館に着いてから、健司は目的のクラスを聞いてない事に気付いた。

（どうして肝心な事を訊き忘れるかなあ、オレ）

嘆いたところで始まらない。探す相手の名前は判っているのだ、とにかく教室の端から順に行けば、何れ当たる筈だ。

「曉^{ぬえ}って……曉夜鳥だよな？」

「あ、はい」

適当な教室で男子生徒に訊くと、名前を聞いてから少し訝しげにこちらを見ながらも答えてくれた。曉又エ。変わった名前だ。どんな字なんだろう、と思ったが、当て嵌まる字を思い付かなかったの
で、すぐに諦めた。

それより健司は、又エさんはどういう人なのかな、とぼんやりと考えていた。先刻も人気があると言われていた……だが、この人の反応を見た感じでは、それだけとは言い切れなさそうだ。奇抜な恰好も原因と言えなさそうだが、あの髪と眼は染めた訳でもカラコンの様にも見えなかった。多分ハーフで、不良という訳ではないだろう。

（じゃあ何で、この人はこんな訝しげにオレを見んだろう……曉さんの名前を出したただけなのに）

「それだったら、この隣のC組だ」

「えっ、あ、はい。解りました、有り難うございました」

別にいいや、そんな事——健司は答えが返ってきたので忘れる事にした。隣の教室で暁さんにやっと会える。それだけで今はいい。

ひよい、と教室を覗いてみたが、記憶に残るあの目立つ容姿は何処にも見当たらない。クラスを確かめるが、やはり二年C組の教室だ。ここに居ると聞いたが居ない。何処かに行っているのだろうか。いや、考えるよりも話を聞いてみる方が早い。

「あのー、すみません」

教室に向かって大声で言うと、一人の男子生徒が気付いてくれた。

「ん……何の用？」

と、健司は相手の顔を見た瞬間、身体を強張らせた。

眼の印象のせいだ。

黒目が小さく、その下に白目の隙間が空いている——三白眼だ。さんぱくがん

確か、人相学では凶相だとかテレビで言ってたな、と思い出しつつ、三白眼なんか初めて見た、と何処か感心していた。凶相と言われるだけあって、何か迫力がある。

「……あ、と。暁又エさんを」

「……………」

健司が口籠りながら言うと、三白眼は黙ってるだけだった。睨まれている様で余計に怖い。

「あのお？」

「君、ここの学生じゃないだろう」

急に、三白眼は言った。

「……?! な、何の事で」

「忠告だ。彼女には近付くな。碌な事にならない」

動揺する健司に、三白眼は何故かそう言った。

意味が解らない。忠告などされる筋合いも、覚えも無いのだから。

「なっ? 何で、そんな事をアンタに——」

「何してんの、槻木君?」つきぎのき

怒鳴り掛けた寸前、不意に、三白眼の後から誰か来た。

「……鯨木、君には関係無いよ」

三白眼は声だけで誰だか解っているのか、相手の顔も見ずに不機嫌そうに言う。

「なーに言ってるの。貴方にも関係無い事でしょ」

彼等の会話が聞こえていたのか、鯉木——何処かで聞き覚えのある名——と呼ばれた、長い黒髪の女子生徒は、三白眼に呆れた様に言い、健司の顔を見た。

「貴方、又エの事を探してるんでしょ？」

「おい、鯉木」

「神経質になり過ぎよ、鯉木君。大丈夫だってば。こんな等閑な対応する訳無いじゃない。柔軟性が無いわねえ」

三白眼が咎める様に言うのも無視して、女子生徒は続ける。

「えーと、貴方。又エだったらね、今は屋上に居ると思うわよ。何だかよく解らないけど頑張ってるね、お姉さんは応援するぞー」

「……はあ、どうも」

訳も解らず、明らかに擲っている節がある声に、健司は生返事しか出来なかった。

*

「どういう、つもりかな。鯉木監査官……」

健司が居なくなっただけ、彼と話していた三白眼の男子生徒——鯉木涼は言った。

「そんな会社の無粋な役職名で呼ばないでほしいわね。私はここでは『山瀬高校No.1美女』であり、生徒会副会長・鯉木鏡花きやうかなのよ？」

鏡花の飄々とした言葉に、涼は呆れた様子で言う。

「馬鹿みたいに長い肩書きだ」

「馬鹿なのは貴方の方でしょ。成績順位、下から数えた方が早い癖に」

「今はそれは関係無いだろう！ 大体ね、僕は勉強する時間が無い

んだ。学生の身で、大企業の仕事をやらされているこっちの事も考えてほしいねっ」

「それは私だって同じよ？ 自分の疎かな学業の成果を会社のせいにするなんて、全く、棚上げもいいところね」

「煩いつ。それに今はそんな話を話しているじゃないんだ」

「喰い付いたのは貴方でしょ。責任転嫁だなんて、堪え性が無いわね」

涼は鏡花に対して何かを言い掛けたが、完全に言いあしらわれている事に気付いて、ぐっと耐えてそれ以上の墓穴を掘るのを止めた。そして彼は一つ息を吐いて、話題を仕切り直す。

「何で、暁夜鳥に見す見すあんな怪しい人間を接触させたんだ。彼女は媒介者^{ベクター}で、会社から監視する様に命令されていたんじゃないのかい？」

「正確には、私が彼女を媒介者^{ベクター}の可能性あり、とただけよ。今のところ確定した事ではないもの、別に構わないわ」

「それにしたって、この高校に学籍を置いていない生徒が、暁夜鳥という対象に会いに来たんだ。疑って掛かる必要はあったんじゃないのかい？」

「逆よ、ただの学生だからこそ、放っておいてもいいのよ。何かしら組織や媒介者^{ベクター}に関わっているなら、こっちは気付かれてないんだから、泳がせてそこから相手を引き摺り出せるわ。ま、十中八九有り得ないけど。いいとこで、何処から又エに会いに来たファンとかでしょ」

「ファンって……」

余りにも馬鹿らしい結論に涼は呆然と呟く。剩え、可能な限り媒介者^{クラー}がその能力を以て問題を起こす事は、防いだ方が面倒が少ないというのに、わざわざ問題になりそうな事柄を投げ出しておくのも、こればかりも良くない。

涼が渋い顔でそんな事を考えていると、それを見て取った鏡花はとても楽しそうに、悪辣に綺麗な笑顔を浮かべた。

「それに、この方が面白そうじゃない？」
「……この、愉快犯」
サディスト

＊

健司は言われた通り屋上に行くと、その姿があつた。

その白い姿は、フェンスに寄り掛かつて座っていた。昼食でも摂っていたのか、弁当箱を茶色い封筒の上に置いて、封筒の中身と思しき紙を、難しい顔をして読んでいる。

「あの、暁又エさん？」

「ん？ 誰？」

健司が話し掛けると振り向いた彼女の姿は、初めて見た時と同じで、現実から懸け離れていた。

白く長いストレートヘアは、本当に絹糸か何かで出来ているのではないかと錯覚する。整った白い顔にある、紅い眼も凜々しくて、何故だか健司は震えた。

動作にも無駄なところが無く、自然体で洗練されている。白い肌は、華奢で弱い感じがするのに、佇まいだけで決して揺るぎそうにない強さを感じた。

——圧倒されてる。

何と無く、そう思った。

又エは健司を見て、その整った眉を少し吊り上げた。

「……何処かで遇ったか？ 何か、見覚えあるな」

「あ、はい！ 遇いました、一週間ぐらい前に街で遇いました！」

健司は覚えてもらっていた事に喜び、この調子なら上手くいくんじゃないか、という期待も相俟って威勢よく答えた。

「ごめん、俺はそこまで覚えてない。一週間前だと、ちょうど黒木くろぎに用事を頼まれてた時だな……」

健司は、又エが自分の事を『俺』と言ったのに少し戸惑いながらも、『黒木』という名前の方に反応していた。用事を頼まれる程に

親しい間柄の人らしい。

「それで、何の用？」

「……あの」

「お、又エじゃん！ 何やってんだよ、こんな所で？ あ、一年生誘惑しちやったりするのなあ！？」

不意に、デジャヴの様に健司の言葉は第三者に遮られた。その能天気で馬鹿そうな声を聞くと、又エは明らかに不機嫌になり、

「……ちよっと、待っててくれ」

と言つて、健司は又エの奇妙な迫力に押されて頷いてた。何か、殺気の様だ。

又エは、急に現れた馬鹿そうな男に言った。

「おい、馬鹿」

やはり馬鹿らしい。

「お、何だ？ リアルファイトに発展しそうな殺気が出てるぜ？」

変わらず、お道化た感じで又エに対応する男。

「よく解ってるな。気絶と失神どっちがいい？」

「どっちも同じだよな？ 殺る気満々だよな？」

「そう思ってるなら都合がいい。だが、お前を殺して人生棒に振るなんて真似はしたくないから、八割死んで二割で生きる。それとさつさと死に様選べ」

（結構、又エさん怖い事言ってるな？ 八分殺しですか？）

健司は突っ込みを入れたいが、関わりたくないのので三步離れて心中に留めておく。

「ヘイヘイ、御託はいいから掛かってきな」

対する男は、やはり馬鹿だ。言っている事の意味が解らない。フアイティングポーズを取って、虚空に軽いジャブを放っている。

それを聞いて、

「それじゃ、遠慮無く」

一瞬。気付いたら、又エはもう男をブツ飛ばしていた。

「ふぶあ！？」

『掛かつてきな』の『な』が言い終わると同時に動いて、それに反応出来ずにファイティングポーズを取ったまま、こめかみに思い切りハイキックを極められてブツ飛ばされる男。しかも又エは、わざわざ爪先で蹴っていた。

不意打ちと言えはいいのか、達人業と言えはいいのか……又エの動きが尋常ではない程良く、速過ぎたので、健司には形容すべき言葉が見つからなかった。

男は、五回程転がった後はぴくりともせずに、死んだかと思う様に気を失っていた。その死に様を確認した又エは、乱れた長い髪を鬱陶しげに整えている。

「……………」

何と無く、声の掛け辛い状況だ。健司が沈黙していると、又エに馬鹿呼ばわりされていた男が呻いた。

「そ、そこな少年よ……」

「うわっ、喋った!？」

「お、お前に託したい事がある……」

「えっ、何、意味判んねえし怖えよ!」

死に体の恰好で意味不明な事を言ってくる男に健司は怯えるが、相手は構わずに続ける。

「今日の又エは——『黒』だ……」

「くっ、黒? 何の事——」

健司はそこではつと気付く。先刻の男の状況、又エがスカートを翻しながら蹴りを決めていた事。

「まっ、まさか!」

「そつだ、少年よ……又エは、黒を穿いていた……」

「すっ、凄え! あんた凄えよ……! あんな風に蹴り飛ばされながら、しっかり見てたなんて!」

健司は思わず男の手を取り、感動にも似たモノを抱いていた。状況では物凄く頭が悪いが。その傍らで、勝手に盛り上がっている男二人を、又エは意味が判らず傍観していた。

「……………」

又エは首を捻って考えていると、途中でやっと状況を把握し、口を出した。

「……あのさ。俺、今日はスパッツなんだけど」

「——なっ、う、嘘だ……！」

阿呆らしいくらいに絶望的な表情を見せる馬鹿。それに、止めを刺さんと言わんばかりに、又エは言った。

「嘘を吐いてどうするんだ。お前が見た黒は、スパッツの色だろ」

ほら、と又エは何の躊躇いもなくスカートをたくし上げて、穿いているスパッツを見せる。倒れている男に、女子高生がスパッツを見せるという異様な光景が出来上がった。

「何たる事だ……。た、謀られた……無念っ」

妙に時代掛かった口調をしていた男は、がくり、とやっと意識を失った。

「何を言っているんだ、お前」

又エは倒れた相手に軽く蔑む様に言う。その隣で手持ち無沙汰に立っていた健司は、少しだけ得した気分で居た。何にしろ、女子高生が目の前でスカートの中を見せるという行為が、扇情的に見えたからだ。フェティシズムという言葉は、彼にはまだ早い。

「あ、もう昼休み終わるな。話はまた放課後にしてくれ。屋上に来ればいいよな？」

そのまま健司の了承も得ずに、又エは屋上を去って行ってしまい、そうこうしている内に予鈴が鳴り響いた。

高校で一人、屋上に残された健司は、暫らく茫然としていた。

（放課後……って、それまで待つ場所が無エよ）

又エは放課後に会おうと言ったが、それまで待つのに授業を受けるといふ事も出来ないし、校内をうろつき回る訳にもいかない。かと言って屋上で待ち続ける程、彼は忍耐強くもなかった。

（校内じゃ待てねエしな……）

仕方無く、健司は適当に時間を潰せる所に行く事にした。

＊

「よっしゃ！ また勝った、こんな連勝久し振りだぜ！」

健司は筐体の前に座って、嬉しそうに声を上げていた。

時間を潰す為に彼が選んだ場所は、いつも放課後に友人と行った、休日に一人でぶらりと訪れる、下町の繁華街にある馴染みのゲームセンターだった。

（へっへ。色々と順調だからな。俺って今最高にツイてるんじゃない？）

とんとん拍子に進む自分の目的に、少し酔った様な調子で健司はゲームを遊び、それに応じる様にゲームでも連勝していった。挑戦者が来てそれに勝利する度に、笑い転げたい衝動が抑え切れなくなり、彼の顔はにやけていく。

そして、十人目の挑戦者に勝利し、とうとうその気持ちを声に出した。

「はっは！ 弱エな、楽勝！ 何回挑まれても勝てるぜ！」

優越感に浸りながら、顔も知らない相手を大声で見下す。筐体の向こう側の相手に向けて、意味はよく知らなかったが、侮辱の意味で中指を立てて見せた。正に井の中の蛙という態度だったが、昂揚

から彼は普段よりも気が大きくなっていた。

がたり、と筐体の向こう側で椅子が動いた音がしたが、健司は挑戦者が入れ替わったんだろう、程度に考えて気に止めなかった。寧ろ次の挑戦者をどうやって叩きのめしてやるうか、と楽しんでいる。

健司は常に過去や未来よりも、自分が干渉出来て先に繋がる『今』こそが重要だという自己哲学に則り行動している。『今』を如何に最善に過ごすか、というのがアイデンティティとも言える彼は、細かい事を余り気にしない。尤も、彼からすれば『今がよければどうでもいいや』という、単純な要約の姿勢に収められてしまうのだが。しかし、健司は気付いていない事があった。普段、彼がゲームセンターに行く時間帯は中学の放課後や休日の昼間だったが、今はその時間帯とは違う平日の昼間であり、ゲームセンターとは時間により客の数も種類もがらりと変わる場所だった。そして、その客の中には暴力的な輩も居る。

彼はその事を考慮して、今まで出来るだけ争いに関わらない様にしていたが、馴れに加えて浮かれている今の状態で、そんな注意は忘れてしまっている。

「おい」

「あ？ 何だよ？ 邪魔だからどつか行ってくんねエ？」

健司は男達に話し掛けられたが、ゲームに集中していた為、適当な返事で流そうとして、相手の顔も見ずに乱暴に答えた。すると、急に胸倉を掴まれ、椅子から立たされた。驚いている健司を余所に、男達は彼の事をじつくりと見る。

「その制服、俺達と同じ高校か。一年だな、ちよつと来い」

そう言った四人の男達は、健司と同じ制服を着ており、明らかに彼に敵意を示していた。

「……あ、その」

狼狽^{うろた}えた健司は男達に囲まれ、店の外に半ば引き摺られる様にして連れ出された。外に出た後も怯えて動けず、されるがままに店から離れた、人気の無い路地裏に連れられた。

路地裏は袋小路になっており、奥の方に行ってしまうば道路側から様子は見えない様になっている。音も表に聞こえそうにはない。そして、そこに連れて来られた事が意味する事を、健司は十分に理解していた。

(……やばい、マジでヤバイ！)

健司の胸倉を掴んだ男が言った。

「なァ、おい。お前、名前何ての？」

「え？ あ、ええと……」

「早く答えるよッ！」

「はい！ は、はは速水健司です！」

「そうか。なァ、ケンちゃんよオ。俺達さ、授業が怠くてゲーセンに息抜きに来たんだよ。息抜きだぜ、楽しみに来たんだぜ？」

「あ、はあ」

「なのによオ、誰かさんのせいで全ッ然楽しめなかったんだよ？」

誰のせいだと思つよケンちゃん？」

「さ、さあ？」

健司が惚けた様に言うと、男は健司の頬を殴った。

「テメエのせいだ馬鹿ッ！ お陰で金無駄にしちまったじゃねエか！」

「っあ……」

殴られた衝撃で目の前に火花が散り、口の中に血の味が広がる。

「ったくよ、金を無駄にしたのはテメエの責任だから、テメエに責任背負^よってもらうからな」

(ど、どんな理由だよ！?)

健司は殴られた頬を押さえながら心の中で反論するが、構わず男は続ける。

「それから、俺達を不快にさせた責任も取ってもらうぜ、なあ！？」

健司は腹を蹴られ、思わず跪く。

「げっ……あ、は」

胃の中身が逆流しそふなのを必死で堪えて倒れこんだが、すぐに

体を起こされて、顔を正面から殴られた。

その後、男達の気が済むまで健司は一人ひとりのサンドバッグにされてる中、ぼんやりとした意識で、男達の顔を憶えていた。

（なんだよ、こいつら……寄って集って私刑^{リンチ}なんかしやがって……）

男達は健司が腹に膝蹴りを喰らい、呻くのを笑って見ている。

（一人じゃ何にも出来ない癖に、群れてきやがって……）

「あ？ ンだよその眼は。お前は大人しく殴られてろ！」

健司が反抗的な目で睨むと、男達は更に暴力を強めた。

（こいつら、絶対に殺して——）

心の底からの殺意。時間が経てば、仕方が無かった事だと諦めてしまいかも知れない事だが、今この場で健司が不良達に抱いた憎悪は本物だった。

当然、その剥き出しの敵意は相手にも伝わっている。そして絶対的な優位と嗜虐心を満たす事を欲していた彼等にとって、それはお気に召さないものだった。

「テツメエなあ……自分の立場解ってんのか？ お前は今、俺達のオモチャなんだよ。それが何で、持ち主を不快にさせる眼をすんだよ？ ああ？」

「……知るかよ、ばーか」

ぼそりと、健司はささやかな反撃と自慰の為に小声で言う。だが運悪く相手に聞かれてしまったらしく、男は青筋を立てて彼の鼻面を思い切り殴った。

「あつ、つあ……」

痛みで上手く言葉を口に出せない。鼻の骨は折れてなかった様だが、血で鼻腔が詰まってしまった。

「お前さア……ちょっとアホ過ぎるわ。状況見て何も判んねエの？ あー、そうだな。先刻からム力つく眼で見てるし、周りも見れねエみたいだし——その眼、要らねエよな？」

言って、男は制服から煙草の箱を取り出して、一本に火を点けた。ゆっくりと吸い込み、紫煙を健司の顔に向けて吐き出す。

「煙草の先つてよ、もの凄え熱いらしいな？　それこそ、肉も焼けるくらいよ」

指の間で煙草を遊ばせつつ男は凄惨に笑いながら健司に言う。そして自分が言っている事の意味を理解しているか、反応を窺う様に健司が何かを言うのを楽しそうに待っていた。

無論、健司は何をされるか解り、血の気を引かせる。

「おい嘘だろ！　巫山戯^{ふざけ}んなッ、冗談じゃねエぞ！？　死ね、死ねお前等！！　どうせ出来ないんだろ、ただの脅しだろうが！？」

ゆっくりと眼に近付けられる拷問染みた熱に対し、健司は死に物狂いで暴れる。しかし、男の仲間に体を押さえ付けられていて逃げる事が出来ない。段々と煙草が眼に近付くと、仲間は男を囓し立てる。

「煩エよッお前等！！　黙れよつ、一人じゃ出来ねエからって、仲間と一緒に調子に乗ってんじやねえよッ！！」

その半狂乱の健司を見て、男は満足そうに笑った。

「——有言実行って、いい言葉だよな？」

左目に、ぐじゅ、という音を聞いて、健司の意識は落ちた。

目を醒ますと、辺りは暗くなっていた。

「痛エ……」

仰向けに倒れたまま、ビルの間の狭い夜空を眺めて健司は呟く。

「オレの……眼……」

左目に触れても何も感じない。ただ指先が届かない頭の奥に痛みが巡っている。狭くなった視界で、冷たい風が頬に当たるのを感じると、潰された左目の疼痛が一層増した。

全身に鈍痛を感じながら起き上がり、顔に付いた泥と血を拭う。痛む左目を掌で覆う様に押さえ、時間を確認しようとポケットの携帯電話を弄ると、財布が盗まれている事に気が付いた。

「……あの糞が。糞がッ、糞がッ、糞がッ……」

現状至上主義とも言える彼からすれば、先刻の私刑^{リンチ}は許せるもの

ではない。剩え眼を潰され、しかも自分に不備は無いのに、理不尽な理由での状況の悪化。現状は、最善からは遙か遠いもので、そんな状況にした奴等には憎しみしか抱けない。

（畜生……あいつらっ、あいつら殺してやる……）

ふらふらと、自分が何を考えているのかもよく解らないまま、健司は路地裏を出て近くのディスカウントショップに入った。

（顔は憶えてんだ……。あとは、武器だ。何でもいい、何か殺せる武器を……）

酔った様な千鳥足で店内を歩き回って、健司は武器になりそうな物を物色し始めた。

夜中に泥だらけで顔を腫らし、片目を押さえながら店にやってきた健司を、店員は奇異の目で見ていたが、健司は一時的な憎悪で周りが見えなくなっていた。その上、正常な感覚も麻痺していた為、そんな事は気にする訳も無く、店内を歩き回る。

「……これで、殺してやる」

台所用品のコーナーで、健司は鞘の付いた文化包丁を見つけた。

だが、財布を盗まれて金も持っていない為、包丁を購入出来る訳も無く、それを懷に忍ばせる。

ついでに眼帯を見つけ、その袋をその場で破り捨てて左目に着けた。少しばかりか、外気に触れていた分の痛みが減る。そして、そのまま何事も無かった様に店を出ると、男の店員に引き止められた。「あのお、すみません……。ちよっと、待ってもらえますか？ お客さん、お会計の方をまだ済ませてませんよね？」

「……何の事ですか」

飽くまで白を切ろうとする健司に、店員は少し口調を強めて、彼の手を引っ張った。

「いいから、ちよっと来なさいっ」

「離せ！」

健司は腕を振り払うと包丁を取り出し、店員に向けた。

「なっ、止める！ 警察を呼ぶぞ?!」

「知るか！ オレはあいつらを殺すんだよ！」

健司は半ば錯乱した様子で包丁を振り回す。店員はそれに退かずに、勇敢にも応戦して健司と取っ組み合いになった。

幾ら包丁を持っていたとしても健司は中学生で、相手は彼よりも年上の男だ。腕力で敵う訳が無く、健司は包丁を持っていた腕を押さえられた。

だが健司も押さえられていない片腕で応戦し、我武者羅に相手の顔を殴る。

「ぐっ！」

殴られ店員はよろめいたが、健司の腕を必死に掴み、そのまま引っ張った。

「うわっ！？」

その予想外な動きに健司はバランスを崩し、店員と雪崩れ込む様に倒れた。腕を持ったままだった店員は、受身も取れずに頭を強く打って昏倒し、

「――」

健司の腹にはぶすりと、体の中に異物が這入り込む奇妙な感覚があった。

「――あっ？」

健司は腹の包丁を抜いた。

じわりと、腹が赤く染まっていく。服と肌の間に、妙に暖かい何かが広がっていく。

「い、てえ」

茫然と、腹から出る血が、地面に赤い溜まりを作っていくのを見ながら、健司は立ち上がった。

「なんだよ、これ。オレの、血？」

健司は真っ赤に染まった手と腹を見て、その鉄の臭いにぼんやりと呟く。ふらふらと歩く度に赤い斑が床に出来ていき、彼は血が零れない様に手で腹を押さえながら店を出た。

「何だよ、何だよ。何だよ、これ。なんだよ、なんだよ、なんだよ

……」

通りに出てもふらふらとして前に進めず、自分の体が重力に従って引つ張られる方に、倒れない程度に健司は進んでいく。

夜中で人通りが少なかった為に、健司が血塗れの包丁を持っていて、腹に傷がある事に気付ける人は誰も居なかった。精々変な奴が居ると、近寄らないだけである。

（どっからだよ、どこから、なにが――）

覚束無い足取りで、健司は先刻の路地裏に辿り着き、

「ああ――そうだよ……」

血塗れの包丁を眺めた。

「――あいつら、殺してやるんだ」

健司は呟いて、その場に倒れ込み――死んだ。

五月十四日

健司が死んでから約一時間後に、通報から交番巡査の二人は、デイスカウトショップを訪れていた。万引き犯を窃盗罪で連行する事は珍しくなかったが、今回の通報は事情が違っていた。

？あの、万引きをした少年が……、その、血がそこら中であって……。とつ、兎に角来て下さい！？

通報を受けた指令センターでは、半ば混乱した店員の説明では何があったのか判らなかった。しかし、『血』という言葉も出てきており、店員の様子も普通ではなかったたので、ただ事ではないと思い、近くの交番巡査を現場に急行させた。

現場に到着した二人が見た店内には大量の血痕があり、明らかに万引きだけの事件現場ではなかった。混乱していた店員は、警官が到着したのに安心して一方的に状況を話し始めたが、その話は一応整理されていたものだったので二人はすぐに事態を把握した。

今日未明に包丁を万引きした高校生を引き止めたら、高校生は万引きした包丁で店員に反抗した。彼はそれに対し取っ組み合って抵

抗したが、争っている内にバランスを崩し転倒。その際、頭を強く打って気絶し、物音が気になった他の店員が大量の血痕と倒れていた彼を発見した。それに混乱した店員に起こされた彼が、慌てて通報をした——という事らしい。

二人は話を聞いた後、立入禁止線を張り現場保存をしてから、店内の人の出入りを禁止した。鑑識と機動捜査隊が来るまでの間、二人は怪我をしたであろう高校生を、そう遠くには行けないと判断し、更に失血で死亡してしまう可能性もあるとして、血痕を追って捜す事にした。

そして、その予想通りに二人は路地裏で倒れている学生を発見した。店員から聞いた通り、眼帯を着けているという特徴も一致する。だが、学生は血塗れで明らかな大量出血だった。

「お、おい、君！」

慌てて駆け寄り、呼び掛けても反応が無いので、ぱしん、と軽く頬を叩くと学生——速水健司はうつすらと右目を開いた。死んでいると思ったが、よく見ると血色もよく無事らしい。

巡査の一人は健司の身体に傷が無いか確かめたが、顔が腫れている程度で刺傷痕などは何処にも無い。一体、周囲の血は誰の物かと思議に思った。それは目の前に居る健司の血だったのだが、一度死んだ人間の血だという事は知る由も無い。

「大丈夫か？」

「え……と、大丈夫」

ぼんやりとだが、体を起こしながら質問に答える健司の意識は、はつきりとしており、異常は無い様だった。

「そうか、よかった。血だらけだから心配したよ。ま、傷は何処にも無かったがね」

その時、からん、と健司の手元でした音に巡査は気が付き、その手に握られている血の付いた包丁を見て驚愕した。

「……！ と、ところで、君に聞きたい事があるんだ。昨日——というよりも、今日の深夜なんだけどね、近くのディスカウトショ

ツプで万引きがあつたんだ」

巡査は出来るだけ平静を装い健司に語り掛け、彼には見えない様に、後ろでは相棒に包丁の事を手振りで示していた。

健司はまだ茫然としていて、自分が包丁を握っている事に気が付いていない。しかし、血の付いた包丁は健司が店員に包丁で襲い掛かった万引き犯の可能性が高く、この場にある血痕の主に傷害を与えたかも知れない事を示していた。

「そこで店員と万引き犯が取っ組み合いになつたんだけど、その時店員は頭を打って気絶してしまつたんだ。それで、気が付くと犯人の姿は無く、血の跡だけが残っていて、それは店の外に出る所で途切れているんだけど、何か知らないかい？」

この時点で、二人は完全に健司を怪しんでいた。状況証拠から考えればそれは当然の事で、残る疑問と言えば、周りの血が誰の物なのか、健司が何故この路地裏で倒れていたのか、という事だけだった。

「あーと……」

一方、警官の話で自分が何をしたのか段々と思い出してきている健司は、二人の視線から思い切り自分が怪しまれている事は理解していた。だが、そんな事よりもディスプレイカウントシヨップを出た後の記憶がはつきりしない事の方が気になって仕様が無い。

（オレ、腹に包丁刺さつた、よなあ……？）

自分の腹に傷が無い事を不思議に思いながら、手に包丁が握られている事に気付く。いよいよ訳が判らなくなってきた。そして健司が包丁に気付いたのを見て、巡査は慌てて行動を起こした。

「とにかく、君が血だらけだった理由を聞きたいから、交番に来てもらうよ」

巡査は素早く健司の背に回り込み、包丁を持っていた手を捻り上げる。

「はアツ?! 何でだよ、痛エ! 引つ張ンな!」

「いいから、大人しくしなさい」

健司は必死に抵抗し、振り向き様に、

「離せよ！」

巡査を睨んだ。

「——え、あえ？」

途端に白目を剥いて巡査は倒れこみ、健司は拘束から解放される。

（——あれ？）

その時、健司は警官が急に昏倒した事よりも、自分が一体何をしていたのか理解している奇妙な感覚に疑問を持った。

「な、お前、何をした！」

もう一人の巡査は急に相棒が倒れこんでしまい、スタンガンでも所持しているのかと警戒して警棒を構える。だが、健司がした事は電気ショックを与える事よりも、もっと簡単な事だった。

「……え、いや。何って、何だろう。解るけど、判んねエ……。おっさんが？弱い？から気絶しちまったんだと思うんだけど……」

自分に出来る事を解っていないながらも、急激な理解に健司は今一つそれを掴み損ねていた。もう一度やれば判るかも知れない、と試しに健司は警官の方を向く。

「ひっ！？ 何を、何をしたんだ、お前！ 何を——う、うわ、あああああああああ！」

途端に、警官は後退りしながら意味不明な事を叫び、表通りの方にはたばたと這いずりながら去っていった。

それを眺めながら、健司は自分に何が出来るかを判じて呟く。

「……ああ。これ、何て呼べばいいのかは解んな」

健司は誰かに語るといふ訳でもなく、言う。

「何て言うか、そう。アレだ、頭ン中を乱れさせる——」

気が付いたら、漠然とそれの使い方と名前を知っていて、自分がどうなったかが一向に解らないのにも拘らず、

「？意識乖乱？だ」
アメンチア

その狂気の名を冠するベクターを受け容れていた。

五月十三日

「そう言えば今日、待ち惚け喰らった」

唐突に、学校の帰りに事務所に寄った又エが言った。

又エは一週間前に調べた？四肢狩人？の資料を纏め終わり、それを持ってきたのだが、今は彼方かなたと一緒にお茶を飲んでいる。

又エは口調こそ男の子の样だけど大層綺麗な子だ、と彼方は思う。切れ長の眼は静謐を宿した様に凜々しく、髪も腰の辺りまである綺麗なストレートだ。何よりもその容姿が懸け離れている。

髪も肌も真っ白で、眼は呉藍色くれないを湛えている。この日本人離れした容姿が又エに神秘的な属性を加えて、一種の魔力的な雰囲気がある。

（性格さえどうにかなれば、又エに憧れを抱く刹那的な心情の人達はどれだけ救われるんだろう……。何も知らずに一目惚れなんかした日には、一週間寝込むんじゃないかなあ）

勿体無いなあ、と改めて彼方は思う。

又エは、何故か女の子らしい恰好をする事を恥ずかしがる。私服も、制服以外でスカートを穿いているところを、彼方は見た事が無い。『俺には似合わないし恥ずかしいから嫌だ！可愛いのは無理！』と言うのだが、彼方はそうは思わない。寧ろ、機会があれば是非着せたい。

もっと女の子らしくすればいいのに、と彼方は小さく嘆息した。

「何、待ち惚けって、呼び出されて放つとかれたの？ 又エにそんな事するなんて、度胸のある人も居るんだね」

「違うよ。向こうから会いに来たんだが、時間が無かったから放課後に、って言ったらその後来なかったんだ」

放つとかれているのと同じだ。

「じゃあ、相手の顔は見てるんだ」

「見てるよ」

「似顔絵描いてあげよっか？」

「要らない。もう憶えてる」

「あれ、珍しい。又エが一度会っただけの人の顔を憶えるなんて」

彼方が軽く驚いて言うと、又エは少し眉を顰めた。

「捺夜なつよ、お前な、俺に記憶力が無いみたいない方するなよ。それはまあ、お前に比べたら記憶力は雲泥の差だが……。っていうか、

お前に記憶力で勝てる人間って、そう居ないか」

「まあそれが取り柄でもありますから。でさ、何で憶えてたの？」

「何か、一週間前に遇った事があるらしくて。俺が見覚えがあったくらいだから、余程印象的な事があったんだろっな」

「一週間前だと、晨夜しんやさんに頼まれて？四肢狩人ししかりうど？を又エと調べてた時だね」

又エは少し身を乗り出した。

「やっぱり、憶えてるか？」

「多分、思い出せるよ——」

五月六日

その名が南川市に伝播し始めたのは最近だ。

初めは有り触れた——と言うのは、変だが——変死体が見つかったという事件だった。

大体今から三ヶ月前の被害者が、一番初めに『狩られた』とされる人で、フリーターの男性だった。

河川敷に男性の死体は転がっていた。発見者は朝早く散歩していた老人で、死体を見つけて腰を抜かしそうになりながらも、すぐに警察に連絡したらしい。

この時、救急車は呼ばなかったが、それは当然だった。男性の死体は、誰の目にも明らかな死体だったからだ。検死も必要が無い

程に解りやすかった男性の死体は、左肩から先が無かった。

検死の結果は、腕を切られた時の出血によるショック死。初めは事故によるものかと思われていたが、河川敷には男性の腕を左肩から落とす原因になる様なものは無く、傷の断面からも刃物で地道に切られたものと断定された。更に、死体の生活反応から腕は死後切り取られたのではなく、生前に切られたものという事も判明し、血痕により殺害と切断の現場は同じだと判断された。

それから、警察は男性の身辺や友人関係、素行に到るまで全て調べたが、男性を殺す動機を持っていた者は居なかった。通り魔の猟奇殺人かと思われたが、警察はそうとも断定出来なかった。

犯人は腕を切り落としていたが、骨を直接切るのではなく、関節を外してから切り落とすという方法から、犯人はある程度の医学的な知識を持っている者と見当が付けられたのだ。練習を重ねて犯行が上達していくタイプと違い、かなり周到に計画されている犯行という事にもなる。

そうして危惧した通りに腕は見つからず、場当たりのな犯行に加えて、証拠が無さ過ぎた事で、警察の捜査には何の進展も無かった。そして、そんなニュースが報道された事を世間が忘れた時だった。男性の死体が見つかったから一カ月後に、次は片足の無い女性の死体が見つかった。この女性は都市側のビル群の中にある会社で働いていたが、そことは全く関係の無いビルの死角に死体は放置されていた。

死因はやはり足を切り落とされた際の出血によるショック死。凶器は第一の被害者の男性に使われた物と同様の刃物で、被害者の女性の周りには犯行の動機を持つ者は居らず、切り取られた足も見つからなかった。

だが、警察はこの時点では住民に不安と混乱を齎さない様にと、この二つの事件の関連性を公表しなかった。その為、この女性の事は、変死体が発見された、とだけニュースで報道された。

十中八九、男性と女性を殺した犯人は同じであるという確信が警

察にはあつたが、男性と女性に何の接点も無く、全く関連性の無い場所で犯行が為され、更に切り取られた四肢も持ち去られたらしいという事から、計画的な無差別猟奇殺人事件だと警察は考えた為だった。

だが、それ以外は全く何も判らず、またも捜査は行き詰る。

それから二週間後に少年が殺された。腿から先が無く、死体は駅近くの目立たない路地に放置されていた。

今までと同じ様相を呈している事件に、流石にマスコミや地元の住人も以前から抱いていた、連続殺人犯が居るのではないか、という懸念を警察に訊ねようと連絡が殺到した。それに対しての対応が追いつかなくなってきた警察は、とうとう一連の事件が同一犯によるものと断定している事を公表する。

それにより以前から少々騒がれていたとはいえ、地元ではちょっとした騒ぎになり、小学校では保護者付き添いでの登下校を実施し、中学と高校では下校する時には出来るだけ二人以上で下校する様に決められ、都市側の方ではそれぞれのビルに警備員を増やし、警察官が定期的な見回りを行う様になった。

そして、その連続殺人犯に対し、体の一部を持ち去るという、その猟奇的な犯行からゴシップ誌やネットでは、殺人犯は段々となる名前で呼ばれる様になり、その名前は街中に広がっていった。

それが――？四肢狩人？

「次はその一カ月後。これが一番最近のものだ。夜鳥が住んでいる住宅街で、専業主夫の右腕が無い死体が自宅で発見された。これも今までの事件と同じ特徴を有していて、いつの間にか名前が付けられていた？四肢狩人？とやらの仕業だ、と既に言われている」

晨夜は、ばさりと資料を乱暴に机に置いた。

「……そんな事を伝えたい為に、わざわざ俺を呼んだのか？」

高校の帰りに呼び出された又工は、明ら様あかさまに不機嫌そうな顔をしていた。

晨夜は今朝から何処かに出掛けていると思ったら、書類の入った封筒を持ち帰っていきなり、夜鳥を呼んでくれ、と彼方に言ったのだ。しかも、来たら来たで年頃の女子高生にし始める話が殺人事件について。それでは確かに呼び出される側は堪ったものではないだろう。

「まさか。お前に手伝ってもらいたいからだ。伝えるだけなんて事はしても意味が無いだろう？ 第一、用があるから呼んだんだ、用も無いのに事件の事を伝えてどうする。俺はそんな風に時間を浪費する趣味も、暇も無い」

「又エが必要って事は、霊ですか？」

晨夜は頷いた。

「正確にはベクターの関与という事だが、その可能性もある」

「……可能性って、それなら理由を説明しろよ。霊絡みの事件なら俺は手伝うが、ただの殺人事件だったら警察に任せればいい。いつもみたいに何も言わないなら、俺は帰るぞ」

又エが不機嫌さを隠さずに言うと、晨夜は呆れ気味に言った。

「そんな事、この事件に関してしっかりと調べれば、すぐに怪訝おかしいと思うところに気付ける。お前、一般に？ 四肢狩人？ の仕業だと言われている事件の特徴は知っているだろう」

「被害者は四肢の何れかを持ち去られている」

「そうだ。では、その犯行方法は？」

「刃物で地道に、ですね。それも生きてる時に」

その猟奇的な犯行方法が受けているから、？ 四肢狩人？ という名前は不謹慎にも街に蔓延している。テレビでは犯罪心理分析学者といった人間が、真面目な顔で尤もらしい事を語ったりする番組もある程だ。

街に犯罪者が居るとするのは恐怖である反面、実感が無いのであつと言う間に程好いスリルにすり替わってしまう。それに危機感を感じるのは身近に感じた時だけだ。つまり、本当の意味で犯罪者が街に居るなんて事は、脚色された真実としてではなく、ただの事実

として知った時にだけその異常さを目の当たりにする。

情報だけの非日常は事実の日常と中々繋がられない。

「そこが怪訝しい。生きている人間の腕を切り取るのに、薬品が使われたという事が一言も報道されなかった」

だからこそ、情報を聞くだけでは見落とす事が沢山ある。

又工は鸚鵡返しに、薬品、と不思議そうに呟いた。

「気絶させたのかも知れないだろ」

「それこそ有り得ない。気絶している間に刃物だけで四肢を切り落とせると思うのか？ それに幾ら骨ではなく関節を切っているとはいえ、そこに当たった時にかなり苦痛する筈だ。それだけ時間が掛かるのに、被害者が気絶している間だけでの犯行は不可能だ」

「そうですね……。気絶してたとしても、腕を切り落とされてれば流石に気を失ったまま、とはいきませんよね。仮になっても、その間に絶対気が付きますね」

「そうだ。大体、生きている間に四肢を切り落とすというのは、少なくとも無抵抗な状態にさせてからでないと出来ない。死んだ人間をばらばらにするのでも、余程早くて二時間、普通ならば半日は掛かるだろう。腕だけを持ち去るのだとしたら、関節を外し、肉を切り終わるまで数十分は必要だ」

それに反論する様に又工が言った。

「警察が薬品に関して言わなかっただけっていうのは？」

「それも無い。必要性が無いからな。わざわざ被害者に薬品を使われていたという事を隠してどうする？ 住民の安全に配慮すべき警察が、猟奇殺人犯が薬品で気を失わせて殺人を犯しているという重大な事を隠す意味が無い、面子を後生大事にするのが公僕の常だ。寧ろ、そんな事をすればそれが露呈した時に警察は散々叩かれるぞ。それに、これは警察の知り合いから受け取った資料だ。薬品については何処にも書いていない」

それを聞いた又工は複雑そうな表情をした。

「……それで、お前は気絶させずに腕を切り落とすって矛盾に、可

能性を見出したんだな。で、何で今更これを調べる気になったんだ？」

「別に今更ではない。一番最初の被害者の時から違和感があって調べていた。ただ、今回の被害者から事件が変わった気がしてな、虚^{よゆ}有の視えるお前が必要だと思った」

「事件が、変わった？」

「又エは不審そうに呟く。」

「今回のつて、被害者が専業主夫の奴ですよ？ 何が変わったんです？」

彼方の質問に晨夜は片目を細めた。

「専業主夫と二ヶ月前の被害者の女性は結婚していた」

「ん？ だったら、犯人はその夫婦を殺す事が目的だったのか？」

「違う。短絡が過ぎるぞ夜鳥。ニユースやワイドショーでは、より一層騒ぎ出したがな。やれ、今までの事件はこの夫婦を殺す為の力モフラージュだ、とか夫婦を殺害する事で他の事件から目を逸らせる為だ、とか。巫山戯た話だ。そもそも死体を隠す気の無い殺人犯が、謀殺をしている訳が無いだろうに」

「じゃあ何だ、お前は誰にも視られない霊の犯行だから、つて言うのか？」

「そうじゃないでしょ。霊の犯行だとしても、生前に無抵抗に四肢を切り落とせる事にはならないもん」

彼方の言う通り、もしも霊の犯行だとしても説明が付かない。霊は視えないだけで、基本的には人間と同じなのだから。仮にそうだと**パドックス**しても矛盾理由が何なのかが判らなくなる。腕を切り落とす事に固執する理由など、どんなものがあるというのだろうか。

判っている事は——徐に晨夜が口を開いた。

「揃っている要素から考えて、不可能に近い犯行という事。薬品等、犯行に必要な外的要因も発見されていない。そこから演繹すれば、普通は文字通り不可能犯罪だ。証拠が見つかっていないから、という理由ではなく、事実上不可能という結論にしか達し得ない。では

何故、こんな犯行が為されているのかという事を考えると、不可能を可能にする為の何かがあると考えるべきだ。それに加えて、四肢に固執する様な猟奇的な犯行は、まるで虚有の矛盾理由パラドックス。そう考えると、虚有が犯人というのが一番確率が高い。ならば、不可能を可能にしたのは、ベクターだ」

晨夜が自分の推理を説明すると、いつの間にか資料を読んでいた又エが、そこから覗く様に見た。

「だったら、殆ど解決している様なものだろ。死亡者を洗い出して、四肢に固執する矛盾理由パラドックスとしての未練を持っていそうな奴を探し出す——それだけだろ？ 他に何かあるのか？」

「それは、この四件目のわざとらしさだ。模倣犯の様だが同じベクターを使わないと不可能な犯行。だが、三件目までとは明らかに違うものだと思えない。何れにしろ異能を持つ者が犯人だろうが、それは虚有なのか媒介者ベクターなのか——それだけで、随分と変わってくる」

晨夜は、又エの問いに答えている様で答えていない。

「……………」

やがて、晨夜を無言で睨んでいた又エは、呆れ気味に溜息を吐いて資料を机に置いた。

「駄目だ、捺夜。こいつ、これ以上話す気が無い。ここまで聞ければ上出来だよな、もう素直に頼まれよう」

「ま、仕方無いね……。頑張れ、又エ」

又エの肩を、ぽんと叩きながら彼方は言った。

「——で、何であたしも同行しなくちゃいけないの？」

事務所の下にある喫茶店・ウロボロスで、彼方は呟いた。

彼女達が座っている窓際のボックス席は、目立つようで目立たない、店内でも奥まった静かな位置にある。常連客である二人の特等席で、マスターとも暗黙の了解がある程だ。

又エはこの店のマスターが作る洋菓子が目当てで通っているが、

彼方はマスターが目当てだ。いい年の取り方をした老眼鏡を掛けるマスターの、紳士然とした雰囲気堪らないのだと言う。又エからすればただの中年オタクだ。

マスターから貰った、試作品のバニラ・マドレーヌを口に放り込みながら又エは答えた。

「お前も黒木に頼まれたんなら仕方が無いだろ。頑張れ、捺夜」

ほんのりと香る甘い匂いを味わってからアイスココアを飲み、又エはにやにやと面白そうに笑う。普段のローション振りとは変わって、美味しい菓子もあり随分と上機嫌だ。

彼方はウィンナーコーヒーをスプーンで軽く掻き混ぜながら溜息を吐く。

「何かなあ……あたしが行く意味って何？」

「現場の様子でも記憶しておいてほしいんじゃないか？ あ、それだと、自分で行けばいい事になるな。何で自分で行かないんだ、あいつ」

又エはぼんやりと窓から外を眺め、つい先刻晨夜に頼まれた事を思い出す。

晨夜は？四肢狩人？の事件を調べるに当たって、先ず又エに『今までの現場を全て見てこい』と言ったのだ。それがどういう意味を持つのか、さっぱり判らない。

既に晨夜は、今までの事件の事を粗方調べ終わっている筈なのに、何故それを今更自分が調べる様な事をしないといけないのか。又エ自身は己の事を、霊が視えるだけの少し変わった女子高生だと思っている。探偵という役をするには余りにもそぐわない。

その探偵当人は、現場を見てくる事が重要で、犯行跡を見て事件の感覚を掴んで来いと言う。全く意味が解らない。

「デスクワークでもするんじゃない？ 今日持ってきたあの資料、住宅街の分はまだファイルに纏めてなかったみたいだし」

彼方が言くと又エは眉間に皺を寄せた。

「ファイリング、か。俺が何か視たとしたら、それも情報に加える

つもりかあいつ」

「何か悪い事でもあるの？」

「別に、視えないものの情報を纏めてどうするのかと思って」

彼方の問いに、又エは素っ気無く答える。

「んー、でも確かに視えないと居ないのと同じだよねえ。あ、でも又エが視てるって事は、居るのは確かか……。それだと、あたしの世界は影響を受けるのかな？」

「どついう意味？」

珍しく、又エは間の抜けた顔で言った。

「ほら、あたしは視た事も無いし、霊が居る場所に行った事が無いから判んないんだけど、霊があたしの視界に映る時、何か影響あるのかな、って」

「例えば霊の影でも視えるかな、って事？ それは無いな、確かに俺の視界に霊が映ってる時は、光を背負えば影も出来るし、風が吹けば髪も靡く。だけど、俺と捺夜が視ている世界は違^{もの}う。紫外線とか赤外線みたいに、目で見えないけど存在するってだけだろ」

「はあ、成る程ねえ」

又エに視えるモノに『霊』という呼称を用いるのは適切だ。不可視光線の類の様に、目に映らなくとも影響を与えるものとして、非常に解りやすい。

「じゃあ、霊があたしとは無関係なものに影響を与えた場合と、その逆は？」

彼方の視界に映らなくても、居るのならば世界に影響を与えられなければ怪訝しい。その結果は、彼方の目にどう映るのか。

「最初の方はあるよ、多分。例えば、置いてあるペンを霊が持つていった場合は、捺夜の目の前からは急にペンが消えると思う。捺夜は霊の事を視れないから、ペンが消えた事を不思議に思う結果になるかな」

「じゃあ何？ 向こうはやりたい放題出来ちゃうんじゃないの」

確かに、視えなくても意思はあるのだから、やりたい事があるだ

ろう。それが他人に露呈しないというのなら、歯止めも効かずに横暴な事をする輩も居る筈だ。

「だから、そういう事が起きた時には、奇怪な事件が発生するんだろ」

「ああ……そつか。それに、霊には未練があるもんね」

彼方は晨夜が言っていた、存在の定義に於ける矛盾理由を思い出していた。

それは存在という形相に対する質料で、その逆でもある。自分自身では決して理解出来ないが、自分が居る意味で自分がしたい事。

死後、存在が霊——晨夜が虚有と呼ぶモノ——になった時には、未練と呼ばれる矛盾理由が何処にあるかは判らないが、ヒトはそれを実現させたいから生きる。だが、自身では何をしたいのか解らないし、他人に訊いても解る訳が無い。しかもそれは、生きていく内に無くなり、新しく出来たりもする。

つまり、ヒトは何か複数の不明瞭な目的を絶対に持っているという存在証明。そして、個の行動理念とも言えるそれがあるからヒトは存在している。

『存在』と『理由』は、どちらが後でも先でも成り立つ矛盾した関係であって、どちらが欠けても成立する事は出来ない単純不可分なもの。その二つがあって初めて本質証明が宿り、それになるのだ。

又エが視ている、便宜的に霊と呼んでいるものは、死んだ際に未練——矛盾理由——を遺し、それが元になって霊となる——それが

晨夜の霊に対する説明だ。

存在に対する理由が単一だから、それに則して存在自体薄い霊の様なものになるって事かなあ、と彼方は解釈している。それだけに執心して為そうとするから、他のものには目もくれなくなってしまう、と。

「じゃああたしに影響を与えた場合は？」

「それは、触られたとしても気付かないだけだろ。何か違和感があるだけで、日常の中の不思議な出来事として片付く——いや、片付

けるしかないか、絶対に判らないんだから。どっちにしろ霊が干渉してくる時は妙な事が起きて、心霊現象って事になるんだろ。けど、自分の未練に無関係な事をする霊は居ないよ、少なくとも俺は今までそんな霊を視た事無い」

「ああ——」

何だかんだで世間一般の霊に対する認識と変わらない。

パラドックス

霊の未練が矛盾理由で、霊はそれを果たす為だけに行動する。他の人にはそれは解らず、未練に関わった人だけが、霊の行動に接触して奇怪な出来事に巻き込まれる。だが未練とは関係無い普通時で霊と接触したとしても、それは日常の一瞬にしかないから、気にしない。違うところと言えば、成長するという事と、殺したら死ぬという事くらいだろう。

「つまり、あたしは遭遇しても、何の事だか判らなくて無視しちゃうのね」

「そうだろうな。その結果が神秘的な体験になるか、心霊現象になるかは遭遇した本人次第、って事」

だが……、と又工は言葉を続けた。

「大抵の霊は人を殺す。だから、どんな奴にしる俺は——『解体』しなくちゃいけないと、そう思ってる」

又工は、霊の存在を否定する事を、命についてを無感情に語る。

彼方は、それに思わず口籠もった。

人を殺した事があると、又工は言う。

それは四年前の出来事だ。彼方がまだ、晨夜とも又工とも知り合っていない頃。又工は一人称が『あたし』の感情を閉ざし気味の中学生で、晨夜は既に怪奇事件専門の探偵だった。

彼方の故郷の村で事件は起きた。平たく言えば一族で営む鉄鋼業の利権争い。それに巻き込み巻き込まれ、気が付けば家族は彼方以外死んでいた。嘘の様な骨肉相食む事件に、家出をしていた又工は迷い込み、彼方と友達になり、首を突っ込みに来た探偵は、全てを片付けた。

その中で、家出少女は一人の男と知り合って捨て掛けていた感情を取り戻し、彼の最期を見取る事になった。

事件の帰結に火事が起こり、一連の出来事の舞台を燃やしたのだ。逃げ切れなかった『彼』は死に、一緒に居た又エだけは生き残った。助けられた筈だと、自分の能力で^{ちから}どうか出来たと、『あたしが殺した』と呵責を含意した沈黙を又エは続け——口を開いた時には、男の様に振舞っていた。

それから、彼方は晨夜に引き取られ、又エは事務所を訪れる様になる。霊の関わる事件で、殊の外、命が絡む事に拘る様になった。

恐らく、又エは自分を赦せていないのだと、彼方は思う。彼女には責任の無い事だが、それ以上に目の前で一人の人間に死なれた事が、余りにも大きかったのだろう。

又エ自身の問題なので、彼方はそれに口を出すつもりは無い。きつと、又エが自分を以前の様に『あたし』と言えた時が、全てに納得がいった時だ。

（それまであたしは、親友を見守るだけ、だよねえ……）

うん、と彼方は頷き、又エに言った。

「又エ……、今日は帰ったら飲もう！」

「何でそうなるんだ」

「いいから飲もう！」

「俺、未成年なんだが」

「ぐちゃぐちゃ言わずに飲もう、ね？」

「いや、意味が判らない。あ、そうだ。そろそろ行かないと……」

急に絡み始めた彼方から逃げる様に、又エはそそくさと会計を済ませて店の外に出た。

「ねえ飲もうよ又エー、親友のお酒なんだからさー」

「抱き付くなよ捺夜、重い……」

「又エが飲んでくれるなら離すー」

段々と、目的がただ又エと飲みたくなってきただけの彼方は、

それこそ素面で酔っ払いの様に甘えて巫山戯ていた。そして、又エが観念して折れ掛けた時。

がしゃーん、と派手な音がした。

五月十三日

「――あの子だと思っただけど」

又エは一週間前の出来事を聞くと、合点がいった様に頷いた。

「ああ、あの時盛大にこけた奴か。ポリバケツに突っ込んでゴミを撒き散らしてた奴だな」

「多分ね。又エが憶えてるくらい印象的な出来事はそれしか無いよ」
すると又エは暫らく思案してから、意地の悪い、面白い悪戯でも思い付いた様な笑顔になった。

「ははあ。成る程ね、それでか」

「え？ 何、その笑顔」

「いや、あいつが俺の所に来た訳が漸く解って」

「……何？」

「あいつ、捺夜の事をやたらと熱心に見てたんだよ。あの時、俺は制服だったからな。捺夜も同じ高校だと思ったんだろ」

「あれ、じゃあ何で又エに会いに行くの？ 普通、直接あたしを捜さない？」

「さあ？ 俺の容姿を聞いて回った方が、捺夜に繋がる手掛かりを見つけやすいと思っただんじゃないか？」

確かに、彼方と又エでは、アルビノの又エの方が捜しやすいだろう。それには納得出来る。……だから、何であたしを捜してたんだろ。彼方には一向に理由が解らない。

「えーと。で、結局何？」

彼方は何だか喉が渴いて、茶を飲みながら訊くと、又エは笑いを噛み締め、言った。

「お前に一目惚れしたんだろ」

彼方はお茶を吹き出した。

五月十七日

それから四日後に、彼方は？四肢狩人？が出たという話を、事務所近くで聞いた。

それは晨夜と又エが猫の事件で『解体』しに行く、留守番をさせられていた時だった。

初めは特にやる事が無かったので、彼方はソファに寝転がって晨夜達が帰ってくるまで寝ていた。

すると、パトカーのサイレンの音で目が醒めた。

何処かで事件が起きて、すぐに通り過ぎると思ったら、意外にもパトカーはすぐ近くに止まった。徒歩で行ける距離にパトカーが止まったという事と、持ち前の好奇心も手伝い、彼方は現場を見に行く事にした。

事務所を出ると、日が沈み切った後の空気は少し涼しくて音がよく透る。少し離れた場所で、回転灯の赤い光が誘蛾灯の様に野次馬を集めていた。どうやら皆考える事は同じだったらしい。

現場に行くと警察官が野次馬を押さえていて、現場と思しき路地裏には、既に黄色いテープとビニールシートが張っており、奥が覗き込めない様になっている。

彼方は何があったのか近くの人に訊くと、

「殺人だつてよ。三人殺されたって話で、皆？四肢狩人？じゃないかって言ってる」

と返ってきた。

彼方は？四肢狩人？と聞いて、晨夜が調べている事件だという事を思い出し、現場を覗こうとしたが、ビニールシートの隙間から見えるものは何も無かった。それでも現場から警官が出てくる一瞬を狙おうと苦心していると、

「何かあったのか？」

と、不意に後から耳慣れた声で訊かれ、振り向くと晨夜と又エが居た。

「あ、二人ともお帰りなさい。殺人です、殺人。また出たらしいですよ——？四肢狩人？が」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8341z/>

月は何も語らない

2011年12月28日01時45分発行